

密に赴きしを以て遂に堀米町と稱するに至れり

●堀籠有元宅址 町の東方字朱雀町下通東にあ
り東西百二十間南北九十間傳へ云ふ往昔堀籠宮内左衛
門尉源有元の宅址にして有元は南北兩朝騒亂の時新田
義貞の軍に従ひて戦功ありしか延元六年春三月越前金
ヶ崎落城の際戦死せりと云ふ

●彦狹島王墳墓 常町の東北天王山の頂上に古
墳あり高さ九間周圍六十六間平坦にして雜木茂生す里
人相傳ふ是彦狹島王の陵墓なりと一説に上野國群馬郡
惣社町大字植野村なる二子山に王の陵墓ありとの説あ
り然れとも當時は景行帝の朝にして毛野國未だ上下に
分れず兩州に分國されしは仁德帝以降なれば何れとも
定め難からん歟二千年前太古の遺跡茫邈として考證の
資なし姑らく記して識者の斷案を俟つ

◎犬伏町

常町は堀米町の北方に接続せる一小市街なりしも明治
二十二年町制實施以後富岡外七ヶ村を合併して戸數
八百五十三戸人口五千九百余人を有するに至れり此地
は下都賀郡朽木町及本郡田沼葛生の兩町に通する街路

―方重 助太夫

●屋形山城址 大字富士の西山犬栗の東にあり當
城は文明二年佐野越前守師綱か足利成氏の爲に築きた
る城廓なり故に屋形山と稱す後天正の初年大貫越中守
常城に據りしか同十三年北條氏政の弟新四郎氏忠入り
て佐野氏を嗣ぐや大貫氏に代りて此に住すること數年
後遂に廢城せり

●小倉刑部義成城址 大字垂川の西方字舊城内
と稱する所にあり方六十餘間口碑に相傳ふ嘉元元年小
倉刑部義成之を築くと其男小二郎忠元は新田義貞に従
ひ所々に轉戦せしか終に義貞と共に越前に於て戦死す
其孫忠道家を繼ぎ爾來子孫連綿として居城せしか小倉
行成の時に至り天正十八年小田原の役に北條氏政に屬
して戦死し城も廢城に歸せり

●藤岡秀行城址 大字黒袴字本郷より字宮の下
に至る間に在り東西三百六間南北百三間周圍の壘壁猶
存す當城は文明十三年佐野氏の一門藤岡佐渡守秀行の
築く所にして其子孫房重、房行、宗房、政國、秀清等相襲
て居城すること六十五年なりしか後天文十六年三月藤

なるを以て行旅貨物の集散亦頻繁なり

●阿曾沼四郎廣綱城址 大字淺沼にあり東西
百三間南北百二十九間壘濠猶存す當城は治承壽永の頃
足利中宮亮藤原綱唐澤山城の支城として築き其四男
四郎廣綱を城主とす廣綱姓を阿曾沼と改め佐野氏に仕
へて長臣たり爾來子孫の居城なりしか天正年間助太夫
方重の時に至りて廢城せり而して阿曾沼氏は慶長十八
年主家佐野氏斷絶の時共に滅亡せり其系譜は左の如し
△阿曾沼氏系譜

廣綱	阿曾沼氏部亟四郎	朝綱	太郎
親綱	次郎實廣綱二男	光綱	民部亟次郎
次綱	四郎	公綱	四郎
郷綱	四郎太夫	氏綱	彌太郎
貞綱	彌太夫	晴綱	四郎太夫
元綱	民部	方綱	彌四郎

岡に移り佐野氏の臣大貫大隅守政重代りて當城に據り
其孫正宗の天正十三年三月に至り北條氏の爲に攻陥せ
られ廢城せり

●阿曾沼助太夫宅址 大字鏡塚の東南字北山に
あり東西七十間南北九十間餘是れ文明三年十一月阿曾
沼四郎廣綱七世の孫阿曾沼彈正の築く所にして下總國
古河野渡城主足利左兵衛督成氏に仕ふ天文十五年八月
成氏の曾孫晴氏北條氏康と武藏國川越に戦ひ敗走する
や彈正の孫右京太夫遂に當國に歸り佐野氏に依る其後
天正七年六月五日北條氏直兵二萬を率ゐて佐野氏を唐
澤山に攻るや彈正の曾孫助太夫遣兵八百に將とし氏直
の旗下を衝て之を破る降りて慶長十八年四月廿五日主
家と共に滅亡せり

●彦根藩陣屋跡 大字大栗の東北に東西八間南
北十二間の宅址あり是れ江州彦根藩主井伊直孝寛永十
年四月より當地附近を領せし時陣屋を置きし舊址なり
●大綱臣 大字富士の東北大綱山の絶頂にあり方
十二間其南北西の三面に一段低き平地ありて南にある
は長十二間幅八間北にあるは長十二間幅五間西にある

は長六間幅二十六間にして東西の二方は峻絶壁屏列して登攀する能はず西北に一空濠あり各幅六間深さ二丈五尺此濠の對岸に東西五間南北七間餘の平地ありて幅四間三尺深さ一丈五尺の外濠あり之を越へて宇大富士の南方に幅三間深さ五尺乃至幅八間深さ三丈五尺の空濠五條あり相傳ふ此宅址は往古豊城入彦命六世の孫當國の國造奈良別君より其遠裔大綱臣に至るまで世々居住し玉ひし遺跡にして大綱の山名蓋し之に起因せり後世佐野氏本郡を領せし頃は古城と稱したりき此古跡果して其館址なるや否考証の資なきを以て斷定し難きも其構造の遺跡より考ふれば蓋し常人の居所にあらず殊に古老の口碑に往昔より里民此地に獵するも更に獲物なく銃彈鳥獸に中りたる、ともなしこれ皇孫の御座所たりしか故なりとの説あり里俗の僻説信するに足らされとも以て古へより崇敬せる舊跡なることを知るへし是れ何人の居所なりしにや

●松並木古戰場 口碑に據れば大字大栗の松並木は天正十三年二月二日佐野氏の長臣富士源太夫、岩崎左馬之助、船越但馬守、田沼山城守等北條氏直と戦ひ

お故に今尙往々武器の破片を發掘することありとぞ

●安蘇沼 大字黒袴の西南字下の谷と云へる水田中に在り(一説佐野天明驛の東の入口小屋街と云ふ所の田の中にありと尤も當町は佐野町と接続せる市街なるを以て斯く云ひしなり)古へは廣やかなる池なりしも今は多くは水田となり僅かに東西四間南北六間許の沼となりて昔しの俤を存するのみ沼中一面に眞菰生ひ茂りて水も見えぬほとなり故に世俗は眞菰の池と云へり沼の東岸に鴛鴦塚として高さ六尺周圍十四間餘の古塚あり古老の口碑に往昔嘉祿年中大田二郎左衛門式宣と云へる人常に殺生を好み殊に鷹をつかふ事に巧にして或る時鷹狩の歸りに鴛鴦の雄のを一つとりて餌袋に入れて歸りぬ其夜の夢に駿東尋常なる女房委かたちよろしきか恨みかき氣色にてさめくと打なきていかにうたてくわらはか夫をはこそさせ給へると云ふさることこそ候わねと云へはたしかに今日めしりて候へしものをと云ふ猶かたく論すれば「日暮れは誘ひしものをあそ沼の眞しもかくれのひとり疑そうきと打なかめてふつふつと立つを見れば菰のめどりなり打ち驚きてあわれに

遂に氏直を撃退せし地なりと云ふ

●燈塚古戰場 天正十一年正月一日佐野宗綱須葉那坂の役に戦死するや小田原の北條氏直其喪に乗して佐野氏を討んとし同年二月二十八日皆川山城守、成山下總守氏長等を先鋒として下都賀郡藤岡に陣し將に唐澤山城を攻めんとす茲に於て佐野氏の部將赤見六郎左衛門、五月女内藏助等遣兵五千四百人を率ゐて本郡犬伏町大字燈塚に屯して其來襲に備ふ翌三月一日兩軍初めて戦端を開き激戦數時佐野氏遂に敗績して退く北條氏勝に乗して唐澤山城を屠らんとせしに同月五日常陸國水戸の城主佐竹義宣同國下館の城主水谷氏真下總國結城の城主結城晴明等の來援するに會し北條氏の軍利あらず同十四日和を請ふて小田原に歸れり此附近は當時激戦の地なりしを以て今猶古武器を發掘すること多しと云ふ

●金鑄板古戰場 所在詳かならざるも按に燈塚附近の地なるへし此地も天正十一年三月佐野、北條二氏激戦の地なり同十八年四月小田原の役に淺野長政と藤岡城主茂呂彈正久重の部下海老瀬猪野と復此所に戦

思ふほとに朝に見ればきのの雄とはしをくひあわせて雌の死せるありければ益驚き大ひに發心してそれより後は佛門に入り且つ菩提の爲にとて其鴛鴦を共に葬りしは是の塚なりと云ふ

●護良親王の遺蹟 當町大字燈塚に根光寺の古跡と稱する地あり古老之を護良親王の遺蹟なりと云ふ今其舊記に傳ふ一班を擧ぐれば後醍醐天皇の建武元年十一月護良親王藤妃及足利尊氏の讒言によりて當地根光寺に潜行あり當時供奉の人々は阿曾沼民部五郎兼綱小島二郎左衛門正範、赤松二郎則義、村上彦四郎、關根刑部太郎、三井右近、富岡將監、長島右京亮、春日左近次郎、岩崎兵部次郎、小野寺八郎、久賀民部、木曾源三、山縣顯吉、小見玄蕃佐等十五人及び女官南、春日の兩局にして本村に御下向の後ち小島正範以下十二人は王子陸良王を輔佐すへしとの命を奉して暇を賜はれり幾もなく足利直義の偵知する所となり親王は鎌倉の土窟に幽閉せられ同二年七月十七日淵邊某の毒手に罹りて薨去し玉ひぬ時に南の局阿曾沼、關根の兩士に命じて御首を奪はしむ兩士夜に乗して事を果し徹行して當村に歸

り御首と御髪を字船着及字阿曾沼の兩地に埋め局は剃髪して其菩提を吊ひ奉れり是より先き局姪姫せしか同三年二月八日根光寺に於て王子を分婉す然れとも足利氏を憚りて阿曾沼民部五郎の子となし正平五年二月二十日阿曾沼、關根の二氏供奉して相州藤澤遊行寺に至り上人に其實を告げ髪を削りて佛門に入り玉ふ時に御年十四歳なりき兩氏は歸りて其由を南光比丘尼(南の局法名)に語り直ちに何地へか去りて其行く所を知らず後ち王子は法徳の閑々高く聽て同寺の住職となり尊觀と法號し奉れり晩年奥州を巡錫し玉ひて三の戸を距る二里餘小向村の地に遷化し玉へり里民一塚を築きて冥福を修す有未光塚姥又塚或は玉ヶ島波岡と稱する古塚は即ち其墳墓にして今も猶香華の絶ゆることなし御母堂南光尼は弘和二年九月十九日根光寺に於て遷化ありき又尊觀上人の詠歌二首あり曰く

かひそなき身は寛成にかみもせて

せまき菰屋のつちとなるこそ

後ちの世に光りあらはせ予か身も

天てらす神のめくみあらなは

甚た佳なり古歌に

明題部類抜萃抄

三かも浦を松の葉越しに眺むれば

こすえによする天のつりふね

と咏みしは即ち此地なりしと云ふ

●大庵寺

天王山大庵寺と號す淨土宗に屬す當寺は應永年間唐澤山城主佐野秀綱の開基にして當時本郡朽本村にありて無量寺と稱し秀綱の縁族岩崎刑部助剃髮して僧となり以て開山となる永祿十一年佐野昌綱の時今の地に移し大庵寺と改稱したり後ち慶長五年七月徳川家康會津へ出陣の時子息秀忠公當寺に宿陣せられ其出發に臨み當時の住職覺翁和尚は度量英邁にして英氣あり公に乞ひて軍に扈從したるを賞し寛永三年四十一石の朱印地を寄附せられたり後享保十九年正月二十一日回祿の災に罹りしを以て全二十年再建し以て今日に至れりと

●光徳寺

東明山天満院と號し時宗に屬す當寺は唐澤山の城主田原藤太秀郷の娘富士姫なるもの或る日家臣柏崎光徳を供に召連れ野遊せし時端無く大蛇顯れ

安蘇郡

前歌「かひそなき」の御詠は即ち金枝玉葉の御身にして空しく草莽の間に朽ち果て九五の位を踐む能はざる不幸を歎き玉ひし御述懐の詠歌にして寛成は即ち後繼山天皇の御諱なりと云ふ

編者曰く護良親王の生死に就ては往々史家の疑團を狭みし者なきにあらざれとも此地に遊行ありしと云ふは未聞の一異説なり殊に其事蹟に就ては大日本史護良親王の傳又太平記等に據るも建武二年の秋北條時行の鎌倉を攻るや足利直義淵邊義博をして護良親王を土窟に弑せしめし際其妃南の方御傍らに侍りて義博か藪に捨てたる御首を取り舉げ悲み居られしを理致光院の長老かゝる御事承り及ひ候とて親王の御首を葬り奉りしとありて野州下向の事及南の御方の姪姫の事等跡方もなし按するに此異説は世の好事家か作爲せるものならんか然れとも其事蹟として今日まで傳へしものなれば茲に録しぬ

●阿武塚の松

大字鍛塚字本郷にあり幹の周圍一丈五尺高さ九丈餘枝は東北に廣かるゝと八間餘濶として蒼穹を覆ふ傍らに越名沼あり水聲松韻相和して風光

出て姫を呑んとす光徳驚き姫を背負て去ること十町許にして危難を免れ又戻りて大蛇を斬る城に歸るに及て厚く光徳を遇す他の近臣等其事由を知らず漫に之を嫉み謂へらく是戀愛の情に由て然るならんと暗に姫及光徳を誹謗して止まず光徳意を決して身を隠せり姫之を聞き悲歎措く能はず走て佐野の川に到り壁に蛇に遇ふ所に於て身を川瀬に投す然るに護身佛なる彌陀の金像水中に光りを放ち明燈々たり光徳網して彌陀の像を引き上げ一字を建立して金像彌陀を本尊とし光徳即ち出家して姫の菩提を吊らひ自ら光徳房と稱す此事忍ち秀郷に聞ゆ依て更に寺院を新築し東明山天満院光徳寺と號す抑柏崎光徳は菅家の良臣廿一人の中に於て菅公左遷の時波形の津に上陸の日自筆の畫像を賜る此像は後世に傳はり今當郡に名高き旭森天神として祭祀し來る所即ち是なり當山の鎮守天満宮は光徳の祀る所にして神像は運慶の作なりと云ひ傳當山を天満院と稱するは蓋し是か爲なり、境内に光徳手植の白檀あり以て神木とす即ち本朝三木の一なりとて明治十四年縣廳より厚く其保護に留意すへ旨を命せらる又銀杏の老樹あり

一千年以上の星霜を経たるものにして稀世の古木なり
◎田沼町

常町は堀米町の北方數里に在り戸數千八百七十四戸人口一萬二千余人町内に警察分署郵便電信局區裁判所出張所等ありて郡内屈指の市街なり加ふるに佐野鐵道中央を貫通するを以て交通便に商業の繁盛なる町内三個所の停車場を有するに徴しても明瞭なり特に當地の物産として著名なるは石灰織物等其巨擘なり

- 區劃 田沼 戸奈良 栃本
- 小見 吉水 新吉水
- 多田 山越

●唐澤山城址 大字栃本の東方の唐澤山の絶頂にあり城址稜形にして方二十町濠塹石壁猶各所に存す富城は一名栃本城と稱し里俗唐澤根小屋城又牛ヶ城と呼ぶ本丸及南城の遺跡は石壁依然たり本丸の東方に一井あり御茶の水車井戸と稱す又西方を町餘遊來矢郭の下に巨井あり周圍七丈五尺清水常に湧出す之を大炊の井戸と云ふ外郭の東南は岩船山犬伏町に連り西北は田沼

町琴平山に接し所在に壘砦及邸宅の古跡多し抑當城は天慶三年藤原秀郷始めて工を起し同五年落成せる無双の要害にして安倍晴明地鎮の秘法を秘せりしと云ふ秀郷は左大臣魚名公五世の孫にして天慶の乱に平將門を誅し功に依りて下野武藏兩國の守護に任せられ尋て鎮守府將軍に拜し當城に據りて武威を東北に振へ爾來其子孫相襲きて居城せしか六世頼行の時に至り一旦廢城せしも治承四年秀郷十四世の孫足利家綱の二男佐野庄司次郎成俊當城を再興して之に據り初めて佐野氏と稱し子孫世襲して十五世越前守昌綱の孫修理大夫信吉の時徳川幕府山城の禁令に依りて當城を廢し慶長七年二月天明春日岡に一城を築きて移轉せり

因みに記す當城に就て古より古老の口碑に存する奇異譚あり云初め秀郷の城を築んとするや一夜異形の者枕頭に來りて曰く唐澤山は要害無雙にして茲に一城を築かば難攻不落の名城たらん且又公の子孫を守護して武運長久を祈らんと言了て行く所を知らず秀郷奇異の思ひをなし唐澤山に登りて其地形を相するに山河の形勢頗る築城に適せしを以て乃ち當城を築

きたりとそ

●清水城址 大字吉水にあり佐野太郎國綱の築城にして安貞二年より其一族岩崎越前守義基(西佐野と云ふ)の居城たりしが永正年間義基十二世の孫左馬助重長に至り三好村大字岩崎の城に移り當城は大永元年八月より佐野左近將監季綱の居城となりしか季綱來り住すること稀なるを以て其長臣田沼中江川、河田、天沼、清水、今宮等交代守備すること數年後も山田若狹佐野氏の城代として久しく居城せり其廢城年月は詳かならず

●羽室鰻山城址 大字戸奈良字羽室東山にあり里俗の口碑に曰く當城は文治二年佐野左衛門尉實綱の三男戸奈良五郎宗綱の築く所にして孫小次郎宗久の時村内字田中へ移城せりと其他の事蹟傳ふる所なし按に此傳説は誤謬なり東鑑に佐野實綱は國綱の嫡子にして寶治元年六月五日三浦一族に黨して鎌倉法華堂合戦の時其子成綱、景綱、時綱、宗綱等と討死す云々と見えたり而して文治二年は寶治元年より六十一年以前なり故に實綱の末男たる宗綱か六十餘年前に築城の果ありし

とは信すへからず之れ傳者の誤りなるへし

●鳥居戸城址 大字戸奈良の山上にあり往昔鳥居戸次郎なるもの之を築き貞和二年戸奈良宗久の孫左近太夫宗友居城せしが天正年間次郎大夫宗綱の時岩崎村の小幡字治場山に移城せりと云ふ其事蹟廢城の年月共に傳ふる所なし

●小見城址 大字小見にあり永平年間佐野越前守盛綱の次男小見次郎左衛門尉是綱の築く所にして子孫相繼きて居城せり廢城の年代詳かならず

●一瓶塚稻荷神社 大字田沼にあり祭神は豊宇氣毘賣命、猿田毘古命、大宮能賣命、久久能智命、草野毘賣命の五神にして天慶五年五月十五日鎮守府將軍藤原秀郷朝臣が相州鎌倉松ヶ岡稻荷大明神を下野國安蘇郡唐澤城南富士村稻荷山に遷し祀り關東五社の一にして藤家代々崇敬の社と爲し爾後二百四十五年に會し文治二年丙午五日秀郷の裔佐野庄司成俊の代に今の田沼に土を積み一丘を築き大に莊飾を加へて宮殿を富士より移し一瓶塚松岡山稻荷大明神と稱し社領の地を附し佐野莊百數十郷の總社となせりとそ靈驗月に添へ日に増

し著るし寛政十二年庚申正月神祇總官白川白玉殿より其總社一版塚稻荷神社の通額を賜はる祭日は年々如月ヨシキ初午を正祭とし五月十五日を神輿渡御の例祭とす殊に正祭は初午市を併せて七日間賽々の群集すること夥しく其名皆遷に噴々たり

●加茂別雷神社

大字山越菊水山に鎮座す祭神は別雷神なり當社は大同二年五月五日山城國上加茂神社より其分祀を勸請して爾來雷大權現と尊稱せり降て朱雀帝の御宇天應年中より當國唐澤山城主藤原秀郷の深く歸依する所となり社領若干を寄附し爾來佐野家に至り世々神饌料等供納あり近郷十八ヶ村の惣鎮守とす境内に池あり菊水川の源にして今は此川を菊澤川と唱ふ清泉涇々として湧出し大旱の候と雖も曾て涸れしてとなく下流は山腹を迂回して佐野町に至り終に渡良瀬川に入る又池邊に菊花を生す世俗之を雷電菊と稱せり嘉永年間より菊水神社雷大權現と稱せしか維新の際現今の如く改稱せり祭典は例年五月五日九月二十日に執行す

●賀茂別雷神社

大字多田字菊澤に鎮座し祭神

三年之を藤原鎮護の八幡と勸請し寶永二年癸卯に小社を築き祭典法會は該寺の兼務なりしと元和年間大破し終に廢寺となるに至り佛像其他什器等は一派に移し秀郷の位牌は興聖寺に移せしものなりとて今尙現存し宮は舊跡に在り俵八幡即ち是なり

●密藏院

大字山越にあり清瀧山と號す眞言宗に

屬す當院十八世周海天和二年壬戌の記に曰く下野國都賀郡佐野庄山越清瀧山龍谷寺密藏院の開山俊海上人は大本山山城國宇治郡醍醐寺第十二世法印俊海和尚密法弘通の爲め當國に下り五ヶ寺を開基建立す其寺院は高島村寶藏寺、下綱村圓福寺、名草村觀音寺、梅澤村華嚴寺、大宮村如意輪寺也其後當國郡主藤原氏佐野左馬介重綱は俊海上人を招待し永享九己年（今を去ること四百六十四年）當山開基建立し寺中六坊寺録五百石寄進すと、又曰く當寺二十世周專延享二年丑四月の記に俊海上人智行高潔にして瑜伽三密の奥義に通達し享徳二年甲戌十一月九日より禪定に入智拳の印を結ひ醍醐の方に向ひ十一日入寂す享年九十五歳なりと、當寺は大和國磯城郡豊山長谷寺となり末寺十三ヶ寺あり

は別雷命なり當社勸請の年月は天智帝の御宇八年己巳九月山城國賀茂大神を此地に分祀し賀茂別神社と稱し菊澤川の水源にあり其後田原藤太秀郷の歸向する所となり社殿を再建し近郷の鎮守とせり元祿六年本社を再建せり明治五年十一月一たび郷社の格に列せしむ後村社となる

●興聖寺

大字吉水にあり普應山興聖寺と號す曹

洞宗に屬す當寺は元安蘇郡唐澤山下田野入權現堂と云へる處に在り臨濟宗にして天福山興聖寺と号し佐野四ヶ寺の一なり建保二年京都建仁寺を西禪師の後仕千光國帥の創立にして開基は佐野小太郎基綱の妻なり十六世孝山長老に至り改宗して曹洞宗となり普應山興聖寺と改稱す寛永十二年當地に移り今代十八世に至る再興當寺より三百四十六年間嗣法相續他に比例少なしと傳ふ

因みに記す往時新吉水の南端に大同山東明寺と云へる寺領二百石の大刹あり眞言宗にして大同年間の創立なり開山は大僧都知海法印にして當寺は則鎮守府將軍下野守田原藤太秀郷の殺廟のありし所なり大水

●種徳院

大字戸奈良にあり萬年山種徳院と號し

曹洞宗に屬す當寺の創立は永享十年三月十五日にして開基は佐野越前守師綱なり師綱死するの後其妻深く禪法を信し當時の碩學総州葛飾郡國府總持寺住南冥宗陸禪師を請して開山とす依て當所は大乗興法の靈地なりとて淨財を喜捨して一字を建立して信心怠りなかりしか文安二年七月逝去す法名當院開基種徳院殿萬年妙珍大姉と稱す其碑及墳墓は今猶存せり寛治四年明入釋印非なるもの來朝し此地の靈地なることを遙に聞知し當院に來坊して梅垣林の三大字を書し現今に至る綱表門に扁せり慶安二年十月佐野家より寺領二十石を附せらる天保十四年三月二十五日祝融の災に罹り堂宇古記録寶物等盡く烏有に歸す後安政二年加蓋を再建す現今の堂宇即ち是なり道の宮は元本殿拜殿及其他の彫刻物等完備し居たりしか明治十八年類焼せり但神跡に異變なく同二十八年に再建す抑此道了宮は寶永四年相州小田原最乗寺より移したるものなりと云ふ

寶物 大般若經六百卷其他古書畫等數十点あり

●本光寺

大字柄本に在り大明山本光寺と號す曹

洞宗に属す常寺は往昔佐野越前守盛綱の創立する所に
して佐野系圖に大永七年丁亥二月五日卒法名本光寺明
鑑昌公とあり寺號は蓋し之より出てしなり盛綱六世孫
修理亮宗綱天正十一年正月元日本郡彦間の須花坂にて
戦死し同年二月五日足利城より其首級を送還するや家
臣等常寺に葬りたり維新前は圭田三十五石を有せる由
緒正しき寺院なりき

●唐澤山神社 唐澤山は往昔藤原秀郷築城の地に
して田沼町大字栃本と犬伏町大字富士の境界にあり佐
野停車場を距る北一里半山頂に別格官幣社唐澤山神社
あり明治十八年の創建にして秀郷の靈を祀る唐澤山神
傳記に曰く

夫れ唐澤の地たる風景絶佳最も遠望に可なり房總を
雲外に望み豆相を天末に瞻る峻嶽南に揖し常峰東に
供し武甲信誓二毛の諸山羅列して眼前に在り岩船三
疊丘の如く埜の如く左右に踞伏し宛かも將軍裕度垣
懐を開き諸將肅容號令を聴き軍門に相會すか如し
其地形を相するに鼓岩前に吹き螺丘後に聳へ一面は
土阜群松濟々として駢次し一面は石崖峻巖落落々とし

◎葛生町

て突起す之を譬ふれに奇正並ひ出て其隊伍を異にす
るが如し若し夫れ四時の觀を擧れば櫻花旗影を翻へ
し松籟賦聲を起し皎月暈を照し燈雪壁を埋む皆以て
遊目を寓して古今に俯仰するに足る況んや蘭蕙の獲
粟他の供以て擒馘の獻犒勞の饗に擬すべきものをや
其傍の遺跡を尋ぬれば即ち吉水の若宮八幡は秀郷公
塋城の故地たり栃本の本光寺は佐野盛綱の建つる所
にして秀郷公の靈牌存せり公の鏡を祀るものは根
古屋神社と爲す亦栃本村にあり而して蓬山の奥に到
れば公か會て舍する所の石窟あり天造鬼壁に成り數
人を容るへし此の他の藤四の館藤五の淵歷々として
其蹤を徴するに足る蓬山は地形幽邃にして唐澤の敵
窟なると同しからず澗に沿ふて行く奇岩怪石各々其
名を賦せり飛泉あり激湍あり淵瀉き淵承け流相會
して旗川に入る山中四峰並に蓬萊と稱す其四の峰
は層巖巍然水其下を環る漂渺として仙島の觀あり云
々

常町は町村制實施之際中會深山菅の三ヶ村を合して戸

數七百八十一戸人口五千五百六十余人を有す殊に佐野
鐵道の終點地たるを以て百貨輻輳商業殷賑にして又郡
中の一名邑なり常町附近の岡嶽は石灰質に富み其産出
殊に多く一ヶ年凡二十万圓餘に及へりと蓋し佐野鐵道
は實も此運搬の爲めに敷設せしものなるを以て輸出
の便多く従て將來有望の事業なりと云此地安蘇山麓に
あるを以て古昔は山本の里と稱へたりしを爲家卿の
新選六帖

我戀はあそ山もとの背ついら
夏野を廣み今さかりなり
との詠歌ありしより葛生と改めたりと是舊志の傳ふる
處にして眞偽詳かならざれとも山本の里としては和歌
に名高き地なり歌枕名寄匡房卿の歌に
山本の佐野の船橋なか／＼に
樂しきことを云へ渡るかな
との一首あり以て當年の勝區たりしを知るへし

●黒仁田城址 葛生町の西方にあり方百五十間東
西北の三面は濠壘猶存し北隅に正門の古跡ありて西方
に面す常城は寛弘年間俗に朝日長者と云傳ふる大田權

頭行高の築く所にして子孫累世居城せしか仁安二年行
元の時に至りて姓を黒仁田と改め仙賀城に移り佐野氏
に仕ふ依りて常城は佐野實綱の三子長嶋小太郎行政代
りて居住せしか後ち程なく廢城せり

●仙賀城址 葛生町の北方字勢ヶ窪古名仙賀澤山
の頂上にあり方百間西南隅を正門とす城外に河合郭、
杉郭と稱する外郭の遺址あり延長共に百五間又其南方
に松の内郭と稱するあり縦百間横八十五間石壁各所に
存在せり本城は朝日長者太田別當行政の弟大河戸四郎
行光の築く所なり行光は世に夕日長者と稱す後ち姓を
黒仁田と改め其子孫に至りて更に葛生と改姓し數代在
城の後ち廢城せり其年月詳かならず

●堀の内城址 大字中村にあり元弘元年中村刑部
平景春の築く所にして子孫世々佐野氏に仕ふ天正十一
年中村刑部左衛門佐野宗綱に従ひ上州館林の城主長尾
但馬守顯長と本郡下彦間村數葉那坂に戦ひ大敗して宗
綱と共に戦死し爾來廢城せり今猶馬場及柵の遺跡等存
す

●諏訪山岩址 葛生町大字中村東方の山上にあり

て天正十三年乙酉八月佐野氏皆川山城守廣照と戦ひし時築きたるものなりと云ふ

●富士淺間神社 當社は弘長年間の創建に係るも其勸請せし人名は詳かならず天正十八年徳川家康公關東に開府の後榊原式部大輔康政上州邑樂郡館林に居城し大に當神社を崇敬し終に台命を蒙り本宮淺間大權現社及中宮粟島大明神稻荷大明神金勢權現道了權現の四社を改築し併せて玉垣拜殿神樂殿鳥居を創造す時に天正十九年遷宮式を執行し翌文祿元年八月に至り全く其功を竣る寛永九年松平式部大輔忠次木社中宮其他を修復す後永應元年九月十五日館林城主松平和泉守兼壽又改築し世々館林の鬼門除の神と稱したり寛文元年徳川綱吉封を館林に賜はり葛生の地其領地となりしを以て時の神主村櫻加賀は領主に請て宮殿の修繕をなし同五年は東照神君の五十回忌に相當するを以て館林侯顯主となり新に東照宮を境内に富士山の内八町四反六畝歩の神地として附せらる後其立木を伐採して宮殿修葺の材料に供するを慣例とし來りしが明治五年官有地となれり祭日は陰曆四月初中日九月十九日の二回執行す

●村社鹿嶋神社 祭神は武甕槌命なり當社は桓武天皇御宇延暦八年己巳四月坂上田村麿東夷征討のとき此山本の里北山奥に建立し鹿嶋大神宮と稱せり葛生以北梅深北山中十八ヶ村の惣鎮守として崇敬せり後治承元年丁酉の夏霖雨の末一夜疾風雷雨暴かに驟り山壑震動し山崩れ水溢り鹿島の神殿を流すこと約四町にして漸く止る時に大蛇あり岩窟より抜け出しと云ふ後其神殿所在の地を宮澤と唱へ大蛇の抜穴は其處保存す今に於ても尙其崩壊せし處より埋木を掘出すこと往々之有舊社大門の跡四百餘間あり鳥居の邊に二株の老杉あり注連曳杉と云ふ毎歲祭禮のとき注連を此杉樹に張るを常例とす鎌倉幕府の比ひ十八ヶ村の氏子祭禮の坐次を争ひ終に分れて神靈を各所に遷し祀る而して當社は中古佐野家の崇祀する所となり同家より高六十石の神領を附せらる徳川幕府二百六十餘年間は時の領主の欽仰する所たり明治五年に至り氏子相圖り葛生町の中央字泉町の西へ新に拜殿を營み遷座し村社と定め廣島神社と改稱す祭日は五月一日舊曆十一月十五日とす

●八坂神社 當社は土御門天皇の御宇建仁二年當

國一般惡疫流行の際同郡牧村の郷氏相謀り疫癘解除五穀成就の爲め新たに一社を勸請し午頭天王を祀れり其所を今に天王澤と云ふ神主は比企藤七郎能宗と云ひ氏を宮田と改む其子宮内外記能宣より代々神主職を勤む後曆應二年洪水あり神殿神幣御鏡流出して葛ヶ原山本の里今の葛生に留る時に石川某なるものあり神幣御鏡を拾ひ上げたり人皆神慮の在る所を畏信し終に現今の所に崇め祀れり宮田の子孫隨從し來りて猶神職を奉ずること久し明治五年八坂神社と改稱し葛生町外九宿村の郷社と定めらる祭日は例年陰曆六月十五日九月十三日なり氏子は千八百八十七戸あり

◎旗川村

●區劃 並木 免鳥 小中

●妻鳥城址 大字免鳥の平地にあり其築城年月は詳かならざれとも佐野氏の支城にして其臣免鳥氏世々城主たりき天文の初年同伊賀守義房の時に至り赤井山城守勝光入道々休代て居住し永祿二年上野國館林に移り元龜の末年高瀬伊豆守、同紀伊守來りて城代たりしか天正五年四月廿八日北條氏の旗下上州館林の城主長

尾但馬守顯長大兵を率ゐて來攻し城一旦陥落す時に佐野宗納此報を得て來援し顯長を破りて當城を回復し其一族佐野和泉を城代として據守せしむ後慶長二年宗家と共に亡び終に城廢せり(或書に岩崎三郎義宗なるもの故ありて姓を免鳥と改め佐野氏に事ふ云々)とあり按に永正、大永の頃免鳥山城守義昌の名見ゆれば本城は其以前既に築きたるものなるへし免鳥氏は佐野七騎の一人にして勇名ありしと云ふ

●免鳥古戰場 大字免鳥にあり此地は天正十一年四月二十一日の夜免鳥の城主高瀬胤國と上州館林の城主長尾顯長と激戦せし所にして當時兩軍死傷算なく接戦翌日に亘るも勝敗未だ決せざりしか胤國遂に大敗して武藏國三田に走れり此役の戦死者を埋葬せる古塚四個あり戦死塚と稱ふ

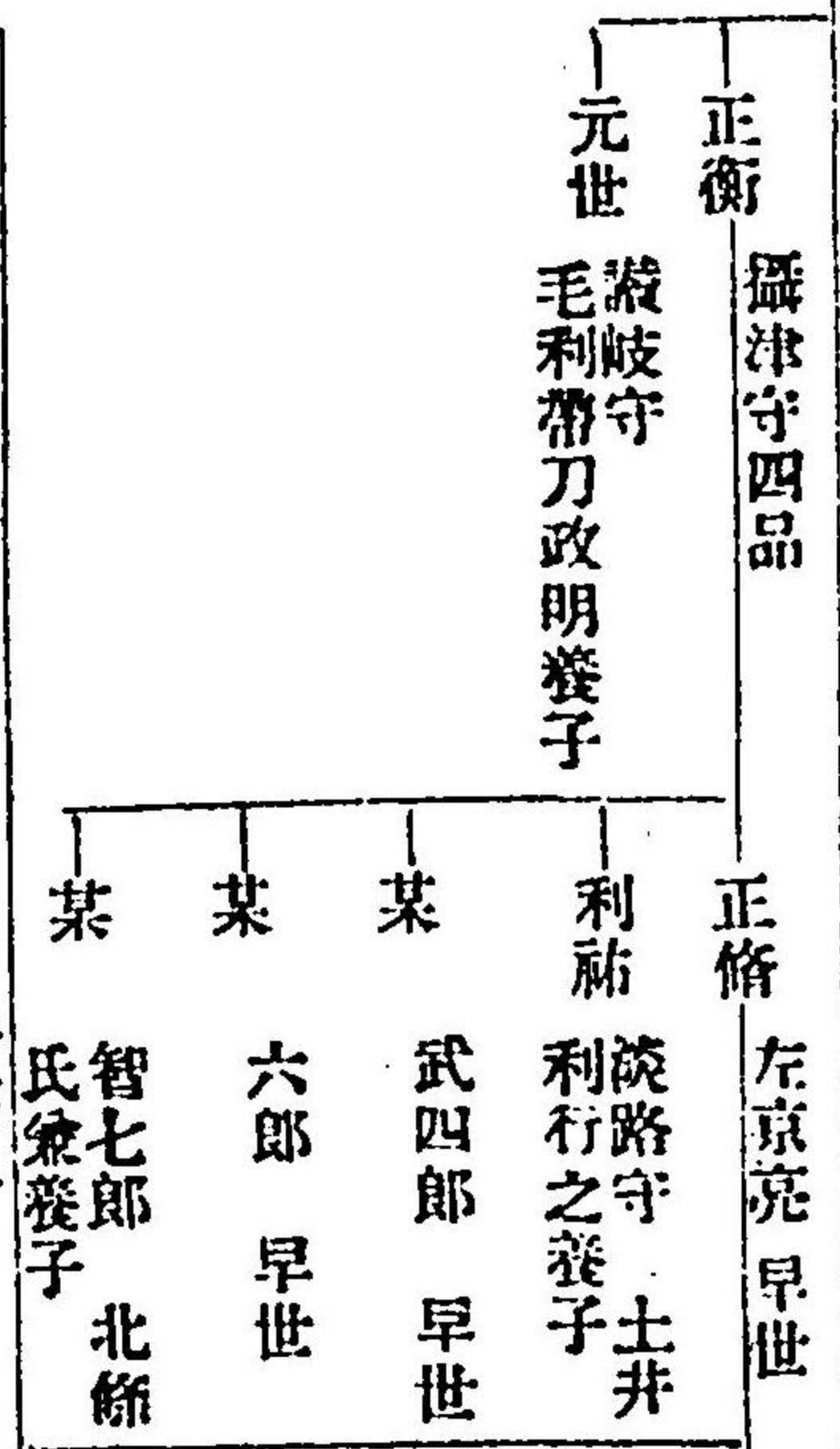
●片葉の苜 大字小中の東北宮の下人九神社境内に一沼池あり池中多く苜を生す而して其葉皆一方に茂生す故に里人小中の片葉苜と稱し古へより傳へて奇とす

●安樂寺 大字並木にあり積翠山安樂寺と號す真

言宗に屬す當寺は往昔筑紫太宰府にありて後ち此地に移轉したるものなるも爾後再三火災に罹り古記録悉く焼失せしを以て其詳細を知るに由なしと雖も古來の傳説によれば延暦年間創立にして昔嘗公太宰府に左遷せらるゝや當寺に寓居し給ひて天拜山へ登攀の當時御遺物として秘蔵の松影の硯を賜はる其後後鳥羽天皇の御宇元永年中唐澤山の城主足利壹岐守家綱仔細ありて本領を没取せられ筑紫に流刑の身となられ又當寺に寄寓せらる後家綱歿に遇て本領に歸るに當り勅許を得て筑紫より當寺を現今の地に移し祈願寺となし寺領五十石を寄附せり後徳川幕府の代に至り朱印地二十三石三斗餘を賜はりしか明治維新の際悉く上地せり而して明治五年暴風の爲め本堂其他の堂宇破壊し現時は假殿なり

◎植野村

- 區劃 植野 赤坂 君田
- 田島 船津川 飯田
- 中船渡

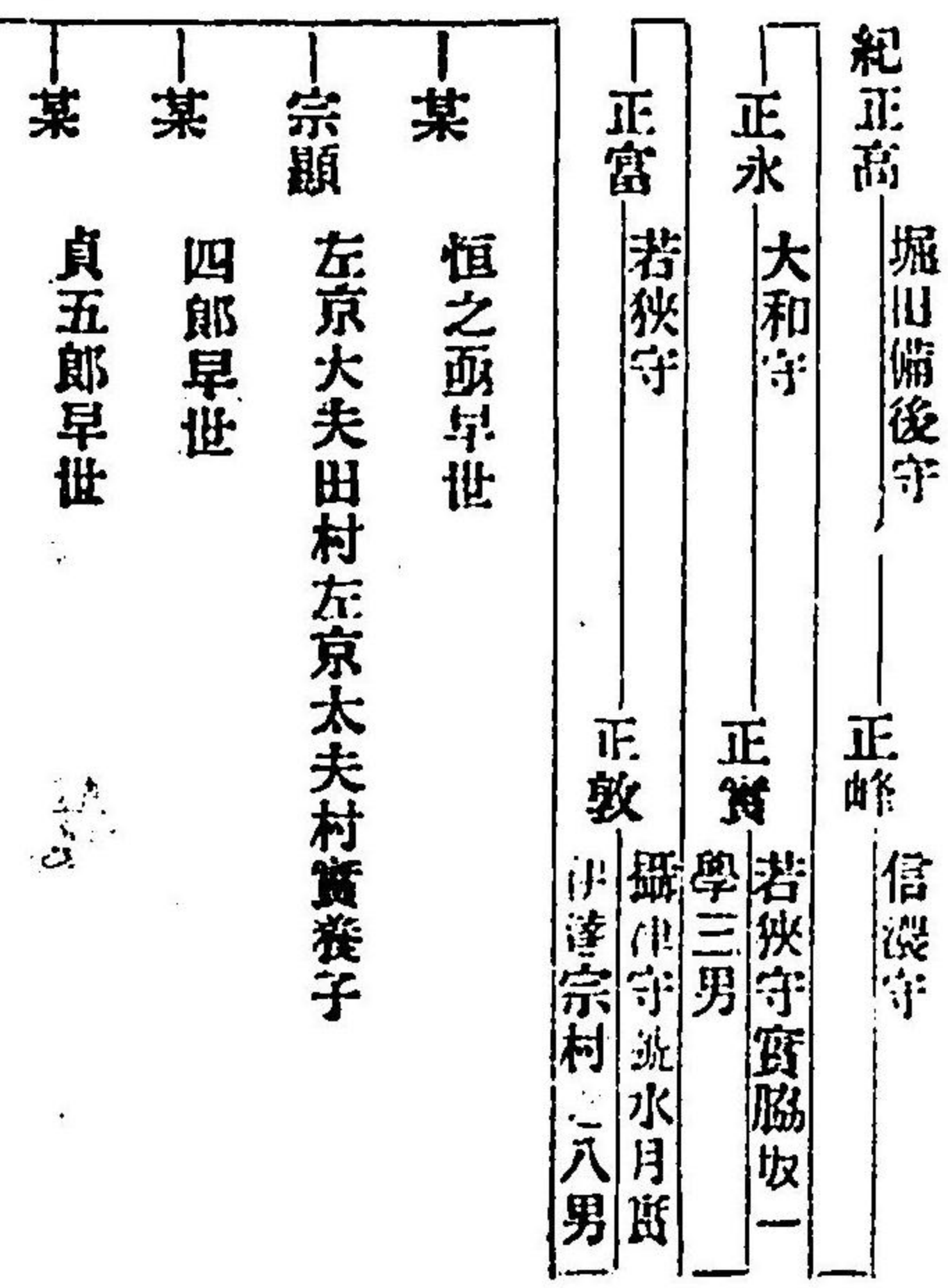


●奥州塚 大字植野字上台町の田園中にあり高さ九尺周圍三十間塚上に古杉一株鬱蒼たりしも今は枯れて其朽根を存するのみ口碑に傳ふ往昔延暦七年紀古佐美征東大將軍に拜し奥州の賊徒を伐ち大敗して此地に退軍す賊軍勝に乗して進襲其た急なり古佐美奮戦して大に之を破れり此石塚は則ち當時戦死者を埋葬せしものなりと

●村社鹿島神社 大字赤坂にあり祭神は健甕之男命、大日靈貴命、伊耶那美命の三神を合祀す當社の舊記に據れば承平年間平將門の叛する當國の押領使田

●植野城址 大字植野にあり貞享元年堀田備後守正高の築城にして其後正高は元祿十一年近江國堅田に移封されしか文政九年正高六世の孫攝津守正敦の時再ひ當城主に封せられ一萬六千石を領し爾來子孫累世居城せしが攝津守正頌の時に至り明治維新の後版籍を奉遷して廢城せり

△舊佐野藩主堀田氏系圖



原藤太藤原秀郷之を征するに當り常陸國鹿島大神に祈請して逆賊を亡はせり朝廷其功を賞せられ秀郷を鎮守府將軍に任せらるゝや秀郷神聖の奇蹟に感して天慶六年冬十一月六日鹿島の本宮より遷して當國佐野庄大明唐澤内藤ヶ崎に安置す其後佐野安房守基綱更に佐野庄春日山に遷し其末裔信吉に至り天命郷三海塚に遷祀せり後寛永四年冬十一月十七日新田長傳なるもの勸請して赤坂村字西小路に社殿を造營す現今の境内即ち是なり寛文十年に社殿を再建し以て今日に至れりと

●東光寺 大字植野にあり龜峰山東光寺と号し臨濟宗に屬す寺記に據れば當寺は延暦年中傳教大師を開祖とし開澄和尚の創立にて比叡山直未なり康元元年に至り建長七世の住勅諡大開禪師來朝して諸山を開基し後當山を開き月洲法乘禪師を勸請して自ら二世となりて之を中興す同時に台宗を改めて禪宗とす後ち天正年間兵燹に罹り悉く灰燼に歸す降て承應年中住山玉堂禪師領主土井大炊頭利重と俱に力を協せて之を中興し舊時の壯觀に復す元來當山は藥師の道場にして東光寺の號は一山の總名にて住持は十二庵よりの輪番なるは勿

論なりしに方丈焼失の爲め一時佛殿後なる壇座庵を以て是に充て事務を擧げ來りしに因習の極該遠座庵を以て東光寺と誤認し遂に現時の情勢に立ち至れり藥師如來の緣日は陰曆正月八日、四月八日なり

●俱利伽羅寺 大字植野にあり明王山と號す眞言宗にして談林格なり當寺の創立は天慶元年にして開山は良朝開基は道雄なり寛政及文政兩度の火災に罹り古記録は焼失したるに依り詳細なる由緒を知るに由なし今尙當寺に存する寶物は日輪大師像及梵鏡なり其像享保五年京都山本善益の彫刻せしものにして世俗厄除日輪大師と云ふ即ち弘法大師にして日輪觀に住し玉ひし御姿なり梵鏡も亦享保五年慶範代鑄造せしものにして表面裏面共に法華經六万九千三百八十四字を彫刻しあるを以て法華鏡と云ひ又檀徒慕參の時撞き鳴らす故に慕參鏡とも云ふ境内櫻樹多く殊に絲垂櫻の數株開花の候には近郷近村の雅俗曳杖するもの多し

●赤城神社 大字植野にある村社にして祭神は彦狹島王命、大日本武命なり當社の由緒は人皇十一代垂仁天皇の御宇沙本毘古反逆を企て其妹沙本比女は天皇

の御后なるを奇貨とし謀を比女に授け以て天皇を害し奉り皇位を奪はんとせしが事終に發覺したり是に於て天皇の御兄豊城入彦命孫八綱田、彦狹島兩王に勅して沙本毘古を討たしむ兩王勅を奉りて城を燒き沙本毘古を殺し乱を平らぐ依て各賞を賜はり住國毛野國に歸らんとして科野國日穴咋の邑に至り彦狹島王病て薨し給ふ依て八綱田王屍を其邑に葬り歸國す時に國民此狀を悲み密に當地に至りて彦狹島王の御遺骸を掘り出し毛野國伊保能の郷に齎らし歸りて奉葬し塚を造り其前に祠を建て狹島大明神と稱して崇敬を盡せり後藤原秀郷の歸依する所となり上毛野延喜式内神社赤城大明神祭神五柱の内日本武尊を狹島大明神の殿内へ觀請台祀し狹島を改めて赤城大明神と號し上毛野宮を上宮と稱し下毛野宮を下宮と稱す文治六年三月十五日山越八郎左衛門亮公綱より神主職を久賀式部太夫に命せらる其後歳移り星廻り各所に戰亂ありて兵燹に罹りしか山越刑部神殿を再建し社地及除地三千町歩を寄附ありたり實永三年三月十六日神祇官領より正一位を授けられ宗源宣旨あり明治維新の後上地し同六年郷社となり同

九年村社となる

●寶光寺 大字船津川にあり醫王山寶光寺と號す眞言宗に屬す本尊は藥師如來なり當寺は元和二年三月群馬縣邑郡館林町永寶寺住第七世尊海上人を請して開基せし事は憊なるも天明六年及慶應二年兩度の火災に罹り由緒古記録焼失したるに依り詳細なる傳記を知るに由なし

◎堺 村

●區劃 越名 馬門 高山 高萩

●越名沼 大字越名にあり周圍二十九町面積五十六町餘あり

●村社天命總社淺田大神宮 大字馬門に鎮座す祭神は大己貴命、事代主命、豊城入彦命の三柱なり社記に曰く

當社景行天皇五十六年（今を去ること千二百七十三年前）之勸請也、初日本武尊東夷征討之途次、平當地方之夷賊也、卜當丘建神籬祀神代經營天下、大己貴命事代主命二柱也、同年御諸別王依承天皇命降東國鎮

撫而名當地地方爲天命莊王於其神籬之迹、建祠宇合祀

本國始祖豐城命以爲總鎮守府焉、是當社建立之草創而天命總社號所起緣也矣、後孝德帝御宇當地住民中之五家開拓此土而爲當社再建、依此功今境内末社所謂五社者禮此五人靈也天慶三庚子年藤原秀郷公與貞盛共誅平將門、以功任鎮守府將軍爲下野武藏二國之守、於是修築社殿也、寛永二甲辰年春繼造之者所識列名十六家也、（此十六家子孫今左馬門、越名、飯田之三村也）永正三乙亥北條氏康來攻唐澤城、城主佐野氏逸之渡良瀨川北岸戰且祈捷于當社而得勝退焉、是以爾後佐野氏以當社爲祈願所再造營宮殿也、天正十二年甲申年氏康子氏直亦攻唐澤城、佐野氏出兵干當地奮戰防之使敵不能北進終講和焉、則再三本社祈念之効驗著神靈之威德以大、城主附免出若干也矣云々

◎常盤 村

●區劃 牧 仙波 豐代

●阿土山城址 大字仙波の東方の山上にありて往昔安戸某之を築き後ち長嶋某居城せしか大水二年三好村大字戸室の鶴の澤に一城を築きて之に移り青木某代

りて在城せしも永祿二年滅亡し爾來佐野氏の有となり
後年天徳寺了伯來の住する事數年にして廢城せりと

●佐野源左衛門常世館址 大字豊代の東南大
内にありて方八十間餘壁壁漆塹猶存す口碑相傳ふ是れ
往昔佐野源左衛門常世の住所にして當時鎌倉の執權北
條時頼剃髮して最明寺と號し諸國を巡錫して守護地頭
の治績を視民の疾苦を問ふ適ま當國に來る時恰も嚴冬
にして降雪頗を沒し寒氣甚たし時頼常世の家を訪ふて
一宿を請ふ常世即ち饗應善美を盡して宿泊せしめ自ら
嚮導して領内の各名所を巡遊せしむ時頼大ひに喜ひ後
ち鎌倉に歸りて常世に六萬三千石の領地を與へたりと
云へり

●今宮神社 大字仙波に鎮座する村社にして祭神
は天兒屋根命なり傳に曰く朱雀天皇の御宇天慶二年十
一月鎮守府將軍藤原秀郷朝臣將門追討の祈願に依りて
之を創建奉祀したるものにして後水尾天皇の慶長年間
公の嫡流佐野天徳寺入道了伯迄累代佐野氏大旦那とな
り之を修造したりしが唐澤城沒落後上下仙波兩村の鎮
守となる昔時は二十餘町の社領を有し佐野惣社として

崇尊せられ之れを管理する別當所光明寺あり頗る美觀
なりしか明治五年寺號を廢す當社は明治五年八ヶ村の
郷社に列せられしが同十七年七月縣令達乙第二百五號
を以て村社となる、境内は官有第一種にして千四百拾
坪あり長八十間四尺幅九尺の大通路あり之を大門と云
ふ鳥居あり鳥居より石階五十三階以て平垣の所に達す
是れ即ち神殿の在る所にして境内丘陵を負ひ東南西の
三面眼界大に開け幾百星霜を経たる老杉古松蒼鬱とし
て天を摩し其神寂ひたる風光は轉た登拜者をして崇信
の念を深からしむ抑當社には古來氏子惣代なる家筋あ
り石山幸三郎、石山和三郎、石山紋次郎、石山梅吉郎、野
部平吉、田名網某の六家なりしが田名網氏不幸にして
絶家となる明治五年より小野審人神職となりしが全氏
沒し全廿一年より毛利眞守之に亞き全氏辭職するに及
ひ現任新田貞臣就職す實に明治二十六年七月なりし云
々

●聖法寺

大字仙波にあり清瀧山金藏院と號す眞
言宗に屬す當山は弘基上人の開基にして唐澤山城主佐
野家累代の祈願所なり初め寺家坊と稱へ仙波村字寺家

の入にありしが後土御門天皇の明應三年甲寅三月第一
世弘基大徳にして名望高く此地に移り本院を創設し稱
して清瀧山金藏院聖法寺と云佐野家より附する所の寺
領五十貫七百文并に末寺十八ヶ寺ありたり六世堯雅の
代後水尾天皇慶長年中佐野天徳寺了伯常院に老隠して
山門を創建す今現存せるものはなり十世周譽の代寺領
調を奉行所へ呈す什賣の卷物一軸是れなり二十一世淨
月の代寛政三年三月火災に罹り堂宇灰燼に歸せり二十
二世慶海の代再建す三十二世惠照の代に至り王政維新
明治の昭代に遭遇せり初めは醍醐無量壽院末なりしか
贈權大僧正吉堀慈恭の推舉により明治十四年大本山智
積院末に轉し大僧正松平實因師より免許狀を授けらる
實に三十三世栗原啓運之を受領せり故に智積院法流は
慶運を以て中興開基とす境内は官有第一種にして東西
九十五間南北二十五間此面積千六百七坪とす檀家二
百戸末寺十二ヶ寺あり當寺は北に丘陵を負ひ南は清溪
に枕み天徳寺山の舊城址は高く東方に聳へ西は眼界豁
然旭日山頭に望み老杉古松茂林修竹蔚として四邊を圍
繞し地方稀に見る所の巨刹なり

因に云ふ當寺に明治維新の勤王家肥前の浪士常田與
次郎の墳墓あり與次郎は官軍先鋒出流山義徒の一人
にして慶應二年卯年遂に岩船山下に討死す

◎氷室村

●區劃 柿平 水木 秋山

●黃平原城址 一に木裏原城とも云ふ木村大字秋
山にあり何人の築きしものにや古記の徵すへき者なき
を以て詳かならず留た永祿年中より天正十三年に至る
迄遠藤駿河守、戸叶播磨守、關塚細部、立川伊豆守、關口
大膳、河田丹波、山崎土佐、二渡伊賀守、石原平馬等の豪
族交々居城せりと言傳ふるのみ其廢城の年月も亦知る
に由なし

●氷室神社

大字秋山にあり當社の祭神は大山祇
命にして永徳年間後小松天皇の御宇足利義滿公の時兩
毛の國界即ち安蘇川の水源字氷室に赤部山神と稱し鎮
座す天保五年江戸大火の際領主宗對馬守より急使を以
て火難退除の祈請をなし忽ち鎮火して其邸宅の無事な
ることを得たりしかは其神靈の顯著なるに感し領主は
上京して幹旋盡力し弘化四年十二月十七日を以て勅宣

作田

正一位氷室山神と神官を下し賜ふ祭日は陰曆十月七日なり當所は土地高峻にして東は筑波、加波を西は赤城、淺間を北は日光、足尾等の諸山を指顧の中に眺望し南の方遙かに芙蓉の峯を望み且熱海の烟波を一眸に収るありて風景佳絶と言ふも亦誇稱に非ざるへし

●諏訪神社 大字秋山にあり建御名方命を祭る本社創立の年月は未だ詳かならずと雖も口傳の傳ふる所に據れば大永年間との勸請なりと云ふ享保四年四月正一位の神官を賜ふ社殿壯嚴境内廣潤にして老杉古松其四邊を圍み南に安蘇川の長流を望み前面は田圃相連り平坦又開豁にして沃野千里の榮あり祭日は陰曆九月九日なり

●鹿嶋神社 大字秋山にあり武甕槌命を祭る創立は永祿二年九月常陸國より勸請し字梅木枇杷の澤島帽子岩に安座し其後天和二年八月字梅木へ遷宮したる所なり享保四年二月正一位の宣旨を賜ふ祭日は陰曆九月十五日なり

◎野上村
●區劃 長谷場 御神樂 白岩

岩怪石乱峙す卑俗此地を呼ひて百日鬼と云ふ山頂は平坦にして城址は周圍七十五間、四十五間、三十五間、二十三間、二十間の五級に區劃す石壁各所に存して今猶武器を發掘することあり頂上に田原神社あり藤原秀郷の弟藤四郎永郷を祀る當城は社北に二ヶ所の堀切あり天慶年間蓬山城の支堡として藤原秀郷の築く所にして弟永郷をして城主たらしめしと云ふ

●同上二の出城址 同村小日向山にあり地を抽くこと一千〇三十尺山麓は絶壁屏立して容易に登攀すへからず山頂は平坦にして城址を十層に區劃せり狭きは周圍二十間より廣きは六十間に至る傍に堀切二ヶ所及び方三間の井あり當城は蓬山第二の支城にして藤原秀郷の弟藤五郎興郷の據りし所なり頂上に興郷を祀れる田原神社あり附近より古武器を發掘することありと

●同上三の出城址 同村の南方字張切内なる朽久保、嶽山の兩山脈相迫りたる地勢險惡の所字切所の地にあり其中央に四方院又關岩と名つくる方十間餘の巨岩あり其形狀頗る奇觀なり當城も亦蓬山の支城にして

●蓬山寄居城址 野上村大字長谷場の東南下長谷場にあり城址は平地より高きこと二百五十間登攀難し東西四十間南北十間あり其周圍に疊壁の如き階段數ヶ所ありて往々武器を發掘することあり城主年代共に詳ならず口傳に依れば往昔藤原秀綱出澤山城の支堡として築きたるなりと云ふ

●白岩山城址 大字白岩の東方白岩山にあり往昔蓬山城の支城なりしと云ふ今猶石壁各所に残りて往々古武器を發掘することありと云ふ

●蓬山城址 大字作原の東北寶生山の半腹にあり東西二十間南北百間馬場泉水等の名残を存す當城は天慶年間藤原秀郷の築く所にして其弟藤四郎永郷、藤五郎興郷、藤六郎友郷等交代して居住せり城内に當時軍鼓を打ちし所なりとて陣の手と稱する地名及び近傍に秀郷忍ひの岩屋、寄居、射向、平張、切内、押木戸等の地あり廢城の年月詳かならず

●蓬山一の出城跡 大字作原字中畝山にあり東は大戸川に接し西は小戸川に臨む山麓に馬場跡あり奇

て天慶年間秀郷の弟藤六郎友郷の據りし所にして其廢城年月は定かならず關岩の傍に友郷を祀れる社あり

●蓬萊山 大字作原に二嶺あり共に高さ二十丈餘東西二峰相接續して宛然連壁の如く之を蓬萊山と呼ひ其名遠邇に高し金山皆巉巖突兀として崛起す西峰は絶壁屏列利刀を以て削成せる如く東峯は絶頂に毘沙門大黒の二神を祀り浦島子の釣船、天の浮橋と稱する奇岩怪石あり其風景亦佳絶なるを以て遊人の杖を曳くもの少なからず

●二つ瀧 大字作原の北方幸治館山の半腹にあり高さ十五丈幅三間瀧崖絶壁の間より流下し岩々に激して三層となる故に此名あり水聲響々人耳を聳す下流は野上川に注ぐ

●大島籠守神社 大字長谷場の長谷場山麓にありて日本武尊及底筒男命を合祀す社傳に曰く本村は往昔野上郷と稱せしが元和二年分村して作原、白石、上下長谷場、御神樂の五ヶ村となり其當時上下長谷場兩村の惣鎮守に奉祀せり其創立年月は遠邇にして詳かならずと雖も一説に昔時佐野家に祟る事ありとか故に佐野

左馬介重綱當社を建立して奉祠せしものなりと、元祿十四年一月神祇官より正一位の宣旨を賜はり祭典には本村古百姓四十八名が列席して一月一日及七日の兩日には種々の供物をなして祭るの古例式あり又大祭は陰曆三月十五日及九月九日に執行し小祭は一月一日及六月二十日とす本社馬場は平坦にして廣く境内には老杉鬱々として翠綠枝を交へ其樞樞の巨樹其間に點綴して實に幽邃を極む又北は山を負ひ西は野上川滾々として流れ南は廣漠たる田甫一畔に鍾まり眺望佳絶の勝地たり殊に當社は婦人の安産に靈驗ありとて參拜者常に絶へず

●村社宇都宮神社 大字白岩にあり大己貴命を祀る當社勸請の年月は天文元年九月九日にして創立は元祿十五年二月十九日なり神祇管領より御幣御告文を賜り正一位宇都宮大明神と稱す享保五年九月修繕し後又安永七年九月社殿を改造し頗る壯麗を極む寛政元年地頭彦坂民之助より祈願料として年々米一石金一兩を賜はりしが明治維新の版籍奉還に際して廢止せられ明治五年村社に列せられたりと社記に見ゆ

す正治元年より安貞二年迄佐野義基の居城たりしか安貞二年義基清水城に移りたる後は事蹟更に傳ふる所なく唯西佐野氏の居城たりしと口碑に存するのみ

●梅曾根城址 大字梅園にあり築城年月は詳かならざれとも世々岩崎氏の居城にして大永二年の頃は岩上安藝、同壹岐、同土佐等之が城代たりしか天正十九年廢城せり

●御所の入城址 大字山形にあり口碑によれば文治年間西佐野義基暫らく在城せりとあり其事蹟及築廢年月は共に詳かならず

●毛野城址 一名神馬城とも云へり大字閑馬下彦間の境界毛野坂にあり往昔佐野安房守貞綱の次男神馬七郎忠綱の築く所にして文明年間久賀氏の一族毛野飛彈守尊親、佐野氏の旗下に屬して當城に住し其子内匠左衛門尉入道福光に至り下總國古河に移り大永二年桂野刑部宗久、同伊豫宗之に代りて城主たり後宗永下総國佐倉に移り天文二十年毛塚大膳頼清、同左衛門尉義高城主たりしか永祿二年より佐野氏の支城となり尋て廢城せり

◎三好村

●區劃 岩崎 船越 戸室

●岩崎城址 大字岩崎にあり往昔佐野基綱の築く所なりしと云ふ文治四年佐野氏の一族越前守義基當城主となり岩崎氏を稱す安貞二年義基吉水の清水城に移り永正年間左馬介重長の時再び當城に移る後永祿二年左馬介春信の時に至り主家佐野修理亮泰綱と戦ひ敗れて常陸國に走り同三年和成りて當城に歸り居住す春信子なし依て佐野昌綱の二男里沙門丸を養ひ佐野駿河守重久と稱し家を襲かしむ天正十一年正月重久其兄佐野修理亮宗綱に従ひ長尾但馬守顯長と戦ひ大敗して宗綱と共に戰死し爾來廢城せり

●室の澤館址 大字船越にあり佐野左衛門尉盛綱の三男船越六郎増綱の居なりしと其事蹟定かならず

◎新合村

●區劃 閑馬 下彦間 梅園

●牛か城址 大字山形の山中にありて里俗館と稱す

●淺利山城址 大字閑馬にあり寶徳三年神馬七郎忠綱の子七郎忠光の築く所にして四世の孫遠江守忠春天文十五年八月武藏國川越に於て戰死し爾來廢城せり

●順花坂岩址 大字下彦間西方の山上にあり建武二年佐野安房守國綱の築く所にして元仁元年より家流出羽城主たり後正長元年四月出羽十一世の孫豊後の時に至りて亡ひ爾來城主を缺くこと九十五年にして大永三年四月佐野秀綱其臣岩下某、藤倉某、多田右馬介、小野刑部等を城代とせしが永祿元年十一月上州館林の城主長尾但馬守顯長の有に歸し其臣影山信濃守の居城となり尋て廢城せり

●佐野宗綱戰死の地 本村大字下彦間の西字須花は佐野小太郎宗綱戰死の地なり天正十一年正月元日宗綱上州館林の城主長尾顯長と戦ひ敗死す後里民宗綱の冥福を修せんか爲め二塚を建立す高き丈餘周圍十八間塚上に榎の老樹一株ありて今猶は枝葉蒼鬱として繁茂せり蓋し佐野氏は當國の南族小山家の一族にして藤原秀郷九世の孫家綱より宗綱に至るまで十數世當郡の領主として兵威四隣に振ひしが宗綱血氣の勇に誇りて

一敗地に塗れし以來家運漸く衰頽せり故に宗綱の敗死は佐野氏の盛衰に於ける關鍵なるを以て特に其戦死の顛末を録せんとす左に記述するは關東古戦録より抄録せしものなり(宗綱戦死の年次に就ては數説あり關東古戦録には天正十六年正月一日とあり又一本に天正十三年正月一日に作る茲に天正十一年正月一日とせしは下野國誌の佐野氏系譜に據る)

下野國栃本城主佐野小太郎宗綱は血氣勇壯の荒武者にて初めは北越の幕下たりしか輝虎卒去の後は佐竹義重の一味となり南方と不和なりし然るに佐野と足利とは入組の所にて年來傾境を論し近年に至ては双方の百姓等動もすれば喧嘩闘争して竟に兩地頭の矛盾となれり長尾顯長は永祿の頃より館林に在城して足利岩井山の城には白石豊前守、淵名上野介を据へ置て守らしむ是より先若林の郷猿田川端にて兩家相戦ひ佐野方打勝て野田に會根を踏み越へ館林近邊まで押入し所に金山より多勢を以て後詰せし故に宗綱退かれたり其後佐野の抱へ鬼邊の堡障に淺羽右近將監齊岑在住せるを足利より不意に襲ひ亦は足利西川邊

氣の短慮にて一向に承引なく夜陰に及て陣觸し明れは天正十二甲申の歲且また篠の目に須花へ押寄せんと誘せられけるが雪中と謂ひ夜中といひ俄の陣觸なれば兎角して旅本勢集り兼成を宗綱腹にすへ兼常參の馬御斗にて石塚の方を志し馳出でらるゝに付て赤見内藏介、富士、大貫馬の口にすかりて夜前よりの深雪殊更元朝の義なれば諸勢出陣に心染す就中今曉敵方遠候の番所にて早鐘の音聞へ申すは後詰の到來心元なし是非に於て思召留られ然るへしと申けれとも運は天にあり遲滞す可らずとて無休に乗り出し須花を差して向はれたり常城には初彦間にありし小曾根筑前守移り居たりしが思ひ寄らぬ朝かけ故上を下へと摺擇して兵器を執りも合さるに宗綱無二無三に攻め入て當るを幸に撫切にし單的に乗捕りたり小曾根も防くに術を失ひ搦手の虎口より潜に脱れ落行けり宗綱是に氣を得て透をあらせず藤坂、彦間の嶺をも踏落さんとて續けや者共とて平地坂道を嫌はず只一騎逸散に驅られし程に即時に藤坂山の北まで乗着し處に連の極めの悲しさは他地よりもなく鐵砲の流

初田台戦にも宗綱奮戦して敵を討ち捕ること若干なり然れとも須花、花崎の兩城を預け置きし小野兵部少輔同姓長門守兄弟討死して其地を顯長に奪はれ日夜口惜しく思ひける故に土民夫嵐子を下知して免鳥領名草境の秣山を荒し麻畑を蹂躪させ立毛を振て狼籍をなさしむること際限なし是歳癸未の臘月廿九日宗綱大貫隼人、富士源太を招て明元旦旗本の人数を率ゐて足利表へ出馬し敵の油断して思ひ寄せらるる處へ押懸け勝を握らんと欲する藤本道の寺岡通りは程遠く其上我兵打向ふと聞かば新田、館林より後詰すへし所詮名草へ出て藤坂の寄居を踏み荒し須花の城を乗捕り相合能くは彦間岩手山にても押かけ短兵急に勝敗を試むへし此趣を以て有司等にふれ知しめ急き人数を馳集め若しも金山館林よりの後詰有て味方引取難き義あらは早速に諸勢馳合する手配を定め置くへしと申されければ富士、大貫是を聞て敵の不意を襲はん事は故の義たりと雖も除夜元旦の戦をは楚の項羽たも好されすと膝にも申傳へたり然へくは敵首の規式も濟て御出陣可なるへきやと諫けれ共宗綱壯

れ鉛子來りて内甲の鎧際を打徹しければ屯もあへず馬より堂と落ち暫しか程は絶入けるを栗田といへる舍人一人附副きて在しか肩かけて半時斗りも引退さけるに敵方の若侍一人脱さしと逐詰しまゝ打捨てて逃去りける宗綱其時息出て細田の畔に腰打懸前後を屹と見渡されければ續く味方はなくして敵と覺しき若侍断來りり宗綱元來強梁の生得なれば心は八猛也といへ共次第に神心勞れて立舉らん様もなかりければ雜兵の手にかゝらんよりは腹を切らんとせられし處に伴の若侍立懸り甲冑の体直人にあらす何様彦野の家の中に大將分の手負とみへたり鎧かぶとを渡されよ疾々と申しければ宗綱打うなつさ兵具はいふには及ふ首共に捕すへし爾しなから暗々と敵の手に死なん事黄泉の障りなるへければ名字を聞て尋常に腹切るへしと申されしかは某は彦間の土豊島七左衛門と申者なり甲冑をたに渡されなは命は助け進らすへしと答へけるに宗綱知る仕義に及び一命を繼て何かはせん介錯を頼むと申さるゝ所に敵又追々みへける故に逃れぬ御命なれば其証を賜らんとて押へて首

を捕落し甲冑太刀まで分捕して豊嶋は退去しけり斯くて佐野の旗本勢主人の驥尾に後れければ爰彼を尋ぬれ共更に行方知さりに舎人の栗田馳歸て爾々の由を告たりし故家人等大に力を落しあきれて詞も勿りし所に富士源太落涙を押へなから府君の討死必定の上は彦間の城中に御座あるへきまゝ一向に馳入て切死に死するか御首を取り返すか二つに一つと申ければ赤見聞て其義も勿論子細なしと雖も心を鎮めて愚按するに只是天魔の所行にして當家滅亡の時至る者か然るに府君無法なる横死し玉ひ吾々も犬死せば敵倍々の所得にして味方未來永劫まで遺恨是に過くへからす一先つ栃本へ引退し家門の内を大將に取立仇を報せん謀今に於ては然るへきか各我々存命せは時節を以て顯長の命をも捕り得ぬといふ事有へからす此義如何にと申ければ富士大貫も同心して諸勢を纏め涙ながらに栃本へ引返す無念なりける有様也此時の落首に

終歳のやみによしなき出馬して

朝日すかた見せぬ小太郎

◎赤見村

●區劃 赤見 出流原 寺久保 石塚

●町屋城址

大字赤見の西北字町屋に在り安元元年正月十三日足利俊綱の築く所なり治承五年俊綱其臣桐生六郎の爲に弑せられしより主を欠く事十餘年なりしか建久元年十月十八日戸賀義宗なるもの當城を再興して居住す其末葉亦見伊賀守の永祿二年二月十七日佐野泰綱の攻むる所となりて城陥り常陸國へ走る爾來當城は佐野の支城たりしか慶長十四年に至り徳川氏の有となり尋て廢城せり

●赤見城址

大字赤見に在り其築城年月は詳ならず口碑の傳ふる處に據れば往昔足利俊綱、同忠綱退隱の地なりと云ふ其後正治元年西佐野能基之に據り後ち戸賀崎三郎義宗を城代として子孫相繼ぐこと十八世、全越後守仲光永祿二年來りて信濃國へ行くや長島某之に代りしか天正年中に至り天德寺了伯當城に退隱して住居し其後廢墟に歸せり

●天德寺了伯宅址

大字赤見の西北字町屋に在り天德寺了伯は佐野修理亮宗綱の弟にして永祿年間上衫謙信に追放せられ山城國黒谷に住す天正十一年正月兄宗綱の戦死するや其宗家の嗣絶るを憂ひ同十七年當國に歸りて赤見城に入り一族を集めて世子を定めんとを謀る衆皆北條氏政の弟氏忠を嗣となさんとし了伯は佐竹氏の子を迎へんとし議論紛然として決定せず了伯遂に怒りて再び京都に歸れり天正十八年小田原の役起るや了伯豊大開の旗下に屬して戦功あり當時了伯還俗して佐野修理太夫政綱と號す文祿二年豊大開の命に依りて富田左近將監知信の二男信種(後秀吉の偏諱を賜ふて信吉と改む)をして佐野家を嗣かしめ同年三月再び髮を削りて天德寺了伯と號し全年十一月二十日此地に一字を築きて移住し赤見山明星院朱雀坊天德寺と號せり後ち去りて都賀郡仙波郷に住せしか再び此地に來りて専ら風月を友として晩年を送り慶長六年七月二日病を以て卒す年四十四爾來居宅は荒廢に歸す

●諏訪部幸快館址

大字石塚にあり正治元年より安貞三年に至る迄信濃國木曾氏の家臣諏訪次郎吉幸

快の隱匿せし所なりとの傳説あり

●石塚牛兵衛宅址

大字石塚の東南字荒居にあり牛兵衛は足利出羽守俊綱の長臣にして性忠烈能く俊綱に事奉養和元年九月十三日俊綱源頼朝と戦ふて敗績し其臣桐生六郎の爲に弑せられ其首級傳へて鎌倉に至ると聞くや牛兵衛憤慨して曰く當國有數の名族にして一敗祖先の業を失するは既に悲惨の極なり況んや其首級を市中に暴露して以て恥を與人に示すは匹夫も猶忍ぶ能はず吾足利氏に臣事するや久し嵩んそ坐視するに忍びんやと一夜間行して鎌倉に至り首級を奪ふて當村に歸り地を相して之を埋葬し其傍に庵室を營みて自ら僧となり以て俊綱の冥福を祈りしと云ふ此宅址は實に其遺跡なりとぞ

●赤見古戰場

養和元年源頼朝其臣千葉常胤、澁谷土佐入道正俊、梶原景季等に命じて本郡赤見山の城主足利俊綱を攻めしむ茲に於て俊綱其子忠綱と共に是を赤見、西山、石塚、小貝島、湧ヶ釜原、山形等の各地に逆撃して激戦數時に亘りしか衆寡敵せず遂に大敗して上野國戸倉に逃る時に俊綱の臣桐生六郎なるものあり

窃かに款を三將に送り同年九月十一日使を遣はして俊網を赤見城に欺むき迎ふ俊網大に喜ひ同十三日從者十餘人を從へ當城へ至るの途次旗川村大字小中字諏訪の森に於て六郎の爲に弑せらる子又太郎忠綱大に怒りて其復讐を圖りしも事遂に成らずして止む是より先き頼朝の叔父志津三郎先生義廣頼朝に叛して兵を常陸に起し鎌倉を襲はんと當國の豪族を誘ふや忠綱密に之に應ず幾もなく義廣誅に伏し頼朝の忠綱を捜索すること頗る嚴なるを以て遂に奥州に走り後西海に赴き其終る處を知らず一説に忠綱は平家滅亡の後足利の奥彦間の山中峽澤と云へる地に潜居せしか終に生害し其靈を忠綱明神と祀りて今猶存すと云へり孰れか是なるか詳かならず

●磯山 大字出流源の中央磯池の背後に峙立す山甚た高からざるも山中奇觀に富めるを以て著名あり金山怪岩奇石にして老松古杉其間に点綴し風光佳絶あり半腹に巨岩あり唐櫃岩と云ふ其北方一帯は斷崖絶壁にして高さ七仞餘石階を設ること百有六頂上に雷電神社左方に辨天堂あり賽者多し一步を失すれば忽ち深溪不歸

帝の御宇北面の士となり有名なりしと云ふ法名は滿願寺殿前赤見大守一境道樂大居士と號す

◎飛駒村

●小野高吉城址 字上彦間栗谷山の絶頂にあり方三十間平坦にして楕圓形をなし石壁古井猶存して樹木鬱蒼たり當城は唐澤山城の支堡にして天正年間佐野氏の麾下小野兵部少輔高吉此に據守し上州館林の城主長尾但馬守顯長と屢々兵を交へしが天正十年十二月十日顯長の臣小曾根筑前の爲めに殺され終に廢城せり

●駒形神社 大字上彦間にあり祭神は天兒屋根命なり當社の創立は後奈良天皇の御宇天文十年にして古來佐野庄上彦間村の惣鎮守と崇めしが世の移遷と共に舊記湮滅して其由来詳かならず正一位の神位は元祿四年三月授けられしものなり例祭は毎歲四月十五日に執行す

因みに記す神職は應永年間よりの舊家にして元と加賀國白山神社の神官たり祖先神山新左衛門宗吉より當代まで三十一世奉仕せりと云ふ

●根本山神社 當社は天正元年四月一日の創立に

の客たるへし社背巨穴あり其深さ幾百仞なるを知らず穴中常に風あり冷なること氷の如し口碑相傳ふ是れ富士の人穴に通ずる洞穴なりと西方一帯は數丈の絶壁にして西南は田野遠く開けて際涯なく渡良瀬の急流其間を蛇行し來りて夫來の白帆飛鳥に似たり無數の村落は各所に散点して浮島の如く左方には西浦、唐澤の諸山各々峰嶽を競ふ山麓に磯池あり清淨の水鏡に似たり斯山の風光は千態萬狀にして應接に遑なからしむ故に雅客の杖屐四時絶ゆることなし

●十二法塚 大字赤見の南方下宿にあり圓形にして高さ一丈二尺周圍四十八間口碑に昔し養和壽永の頃關東に大小の戰爭十八回ありて鋒刃の露と消へし者實に六萬人に及べり當時埋心上人なる大徳あり深く其無縁の靈鬼たるを歎き兩野州に十三ヶ所の塚を築きて遺骨を埋め六万部の法華經を誦誦して死者の冥福を祈りしと云ふ此塚は即ち其一にして當國及上野の各所に今猶其塚ありて大小略は同一なりとぞ

●赤見六郎の墓 大字赤見滿願寺の境内にあり赤見氏は足利矢田判官義清二十三世の孫にして後陽成

して世襲の神地靈場たり舊記を按するに往昔役行者富士に登り東北をよみしに瑞雲天に躡くの山あり其山を指して當地に至れば背若滑らかに荆棘途を埋め怪鳥天に峙ち古木鬱鬱たる奇峯あり依て之を根本山と名付く後弘法大師東國飛錫のとき登山し此地を下して云ふ後世遠近の叢群參の靈場となるへしと果せる哉幾星霜を経て吾先祖良西行者桐生川の流に沿ひ登攀して相承の秘法を修し嫡々相傳ふる事三百十餘年始めは信徒等參詣せんとするも霹靂鳴動して山中咫尺を排せず殆ど攀つること能はざりしか若練修行の効空しからず遂に此靈場を開き信心の輩容易に登拜するを得るに至りしなり左れば道晃親王殿下關東へ御下向の時登山有らせられ又舊領主伊井掃部頭及高家宮原彈正大弼旗本野々山丹後守横瀬美濃守等も本社を祈願所と崇め年々神札を拜受して金穀物品を寄進するの例あり其後天保二年四月徳川家慶公の妾歌浦殿病氣の際に當社十代の法印中興の開山永良御名を蒙りて御本丸に登城し病氣平癒の祈禱をなし其効ありしに依り紫縮緬を幕府より賜はり近くは從三位勳二等渡邊洪基陸軍中尉大熊仲次郎の諸

氏亦登拜したり以上信者中一二の重なるものを略叙せしに過ぎざれとも上は皇族を始め奉り世顯精神より下庶民に至るまで其尊信の厚きこと推して知るへし
根本山は海拔四千八百尺穿ること二里十八町にして頂上に達す山頂祠宇の在る所に至れば群山積翠脚底に起伏し兩毛常武の諸州一眸に獲り清泉老樹奇岩怪石千態萬狀偉麗の觀幽邃の趣人をして虛靈の仙境に遊び天地の大寂に入るの感あらしむ山内に根本八景あり曰く根本山の晚鐘、千代ヶ淵の青嵐、花畑の春曉、獅子岩の秋月、大瀧の朝霞、根本橋の夕照、行者山の暮雪、鳥屋場の紅葉是なり

足利郡

◎ 概説

本郡は國の西南隅にありて東は安蘇郡に接し西北一帯は上野國山田郡に連なり南は同國邑樂郡に界す東西三里南北五里にして面積十四方里八分八厘あり本郡は高山峻嶺なく皆安蘇郡根本山の支脈にして北部一帯の地勢は丘陵起伏して唯直立千二百尺の行道山及び大岩山の二峯郡内の中央に雄視するのみ其他の小嶺支峯列擧するに足らず渡良瀬川は上野國山田郡を經て本郡に入り足利町の南端を東流して安蘇邑樂(上野)の郡界に入る其他松田袋名草桐生等の細川小流ありて皆同川に合流せり沿岸の地は平衍にして地味頗る豊饒五穀繁茂す
道路上野より來りて本郡に入り福居梁田の各驛を東に貫通して安蘇郡に通ずると日光舊例幣使街道と云ひ足利町より起り小俣を経て上野國に入るを桐生街道と云ふ其他館林西街道及び佐野田沼の二街道ありて皆足利

町を起點とし交通甚た便なり

鐵道日本鐵道會社の兩毛線は西方上野國山田郡桐生町より來りて本郡の中央を東貫し小俣山前足利を經て安蘇郡に入る

郡衝を足利町に置き全郡を管轄し郡内を一町十五ヶ村に區劃す

足利町	毛野村	富田村	吾妻村
北郷村	山前村	三重村	三和村
小俣村	葉鹿村	菱村	梁田村
久野村	筑波村	御厨村	山邊村

是なり

戸口 最近の調査に據れば現在戸數二万三千六百四十六人口男四万一千九百五十八人女四万三千六百七十九人計八万五千六百三十七人一戸平均人口六人二分八厘一方里平均人口五千七百五十五人一分七厘を有す
民有々租地 田反別二千七百六町二反歩地價金百廿四万四千二百九十七圓畑反別千七百廿五町六反歩地價金二十六万八千八百八圓市街宅地八十八町二反歩地價金七

万六千二百九十六圓郡村宅地八百七十町一反步地價金二十五万四千四百一十一圓山林六千五百九十七町四反步地價金六万五千四百八十二圓原野三十四町四反步地價金二百四十一圓雜種地三町二反步地價金九圓計一万二千二十九町四反步地價金百九十万一千五百八十七圓一反步平均十五圓八十一錢

民有免租地學校敷地八町六反步鄉村社地八反步墳墓地四十五町八反步用懸水路四反步溜池二町九反步堤塘五反步道用地二十五町九反步公園地一町八反步隔離病舎三反步病院敷地四反步計八十七町四反步外畦畔百七十七町步

物産 絹織物其首にして蠶種生糸米穀等之に亞く

◎沿革

本郡は往古より下野國に屬し和名抄に

足利 (阿志加々)

とあり其郷名は同書に

大窪 田都 堤田 土師 餘戶驛家

の五郷名を擧げたり而して後世に於ける其存廢の考證

に付ては下野國誌に曰く

大窪存す今は大久保に作る足利驛と佐野天間驛との間により田部堤田土師共に廢す但し足利驛より上野の國元の往還筋に葉鹿といふ村あり土師の訛に於てはあらぬか餘戶は存す今は五十戸に作りてヨべと唱ふる也足利驛の西の方十餘町許にあり則ち上野への往還なり新田老談記といふ書に天正十二年小田原の北條氏政金山の城を攻ける條に五十戸大岩の郷人等云々と見えたり金山城は上野國新田郡にて新田山と古歌にもよりの新田義貞朝臣も則ち此所に居住せり戸令に五十戸を以て一郷とす若し一郷に餘りぬれば別に餘戸を置と記したり西葉集に五十戸をイへと訓も家の字の訓もよしありよく考ふべし

爾來星霜の變遷と共に郷莊部落の沿革も亦難合存廢を闕としならんも古記の徵すへきものなきを以て詳ならず降りて徳川幕府の慶安元年に至り郡内の村落は四十三ヶ村となり後ち貞享年間には四十六ヶ村に増加し明治維新後は一町四十一ヶ村となり明治二十二年四月町

村制の發布に基き大に町村の分合をなし一町十ヶ村となりしが同二十九年四月一日梁田郡を廢して本郡に合せしを以て一町十五ヶ村に増加せり

梁田 (夜奈多)

の郡名見えたり當時大宅深川餘戸の三郡を有せしか降て徳川幕府の慶安元年には三十三箇村の部落となり明治維新以降は十九ヶ村に合併同廿二年町村制の發布に據りて五ヶ村となり同二十九年本郡を廢して郡に合併せり

足利梁田兩郡往古の歴史は詳からず中古天慶の亂に當國の押領使藤原秀郷平將門を誅伐せし功を以て鎮守府將軍に拜し國守に叙せられしより國內一圓其治下に屬せしが天喜年間秀郷七世の孫成行本郡足利の地に一城を築き地名を冒して足利大夫と稱す之を藤姓足利氏の祖とす爾來其領地となり子孫累世相襲さしが養和元年五世又太郎忠綱の時に至り平氏の旗下に屬せしを以て遂に滅亡せり是より先き久安の末年源義家の三男義國故ありて當國に誦せられ二子を産む義重義康と云義重は上野の新田に居り(新田氏の祖)義康は足利に居りて

足利を姓とせり是れ源姓足利氏の祖にして藤姓足利氏と共に本郡若干の地を領し當國の名族たり源右府海内を統一するに及び藤姓足利氏滅びて義康の三男義兼是に代りて足利城に據り本郡を領す爾來源家の一族として家聲隆々たりしが六世の孫尊氏に至り一旦勤王の義兵を起して北條氏を伐ち後醍醐天皇に叛して頼府を京師に開き北朝の天皇を擁立し南朝と争ふ事數十年にして其孫義満に至り竟に天下を平定して子孫十三世の久しき政權を掌握するに至れり本郡足利は實に其發祥の地たり降りて天正年間北條氏政關東に覇たるに及び本郡は其臣長尾顯長及安蘇郡の佐野氏等の領地となり慶長十八年小田原の役に長尾氏は主家北條氏と共に滅亡し徳川氏の世に迄ひて古河守都宮と共に幕領となり寛文年間に至りて其過半上州館林領に歸し寶永六年より戸田大炊頭忠利足利城に封せられ一萬千石を領し其他は館林守都宮古河幕領等犬牙錯雜せしが王政維新の後明治六年以降は栃木縣の管轄に屬し以て現今に至れり

◎足利町

當町は那の南方渡良瀬川の北岸に位し東西十九町南北十六町市坊二十六戸數四千五百六十六戸人口貳萬貳千三百八十余人を有する郡内唯一の市街にして郡役所警察署郵便電信局裁判所出張所稅務署町役場等の諸官衙及取引所織物講習所等の設置あり街衢端正にして巨賈豪商連指揃比し商業の繁盛なる野州第一とす當町は古來より足利絹其他各種織物の著名なる製産地にして毎月數次上市下市の二個處に市場を開き盛んに賣買せり近年加々機業を奨勵し縣立工業學校を設置して織法科染等の改良進歩を謀りしを以て新業大に發達し技術の巧妙精緻なる京都の西陣上野の桐生と相對峙して遜色なく絹を中央市場に争ふる至れる者偶然に在らざるなり其生産額の如きも一ヶ年四百二萬一千九百九十九圓(明治卅五年年度統計表に據る)に上り他機業地をして一指を染むる事能はざらしむ嗚呼昔日文學を以て我國を發勸せし足利は今や機業を以て覇たらんとす古人言はずや天の時は地の利に如かずと足利の地たる日本鐵道會

社の兩毛線は市街の中央を貫通し渡良瀬川は其南方を東流するを以て貨物の集散旅客の來往には水陸共に便なるを以て將來益々發達の兆あり足利なる哉足利なる哉足利郡の盛衰は足利の榮枯に在り足利の消長は中央市場に影響を及ぼす大なりとせば茲に特筆大書して我國經濟界の爲に感謝すべしなり又室町將軍足利氏の古蹟足利學校鑲阿寺其他の著名なる古跡は別に詳述するを以て茲に省畧す町の西端に公園あり明治十九年の開園に係り假山泉水の風致閑雅にして公衆娛樂の地に適せり

●足利城址 城址は町の西北山上にあり東西八町南北十町四角形を存す今日城址として見るべき名殘たもなく僅に東方に一條の濠塹を存するのみ抑本城は天喜年間藤原秀郷七世の孫足利大夫成行の築く所にして子孫累世居城せり之を藤姓足利氏と云ふ治承四年源三位頼政以仁王の命旨を奉して兵を起すや成行五世の孫又太郎忠綱平軍に馳せ加はり宇治川を先登して大功あり消盛之を賞せんと欲す忠綱上野六郡の大介及新田庄を賜らんとを請ふ消盛之を許す然るに忠綱の族人功を

争ふて争闘し終に果さず翌養和元年志田先生等廣(頼朝の叔父)叛を謀り鎌倉を襲はんとす忠綱其謀謀に與し義廣誅せらるゝに及びて累の波及せんことを恐れ西海に走りて其終る所を知らず茲に於て藤姓足利氏遂に滅じせり

編々曰く忠綱終焉の地は詳かならず當町鑲阿寺の古記録に一異説あり曰く忠綱足利義兼の寄食の身となりて或る夜獨り庭中を逍遙せしに兼て忠綱の容姿に心を倚せし藤野と名ん呼へる侍女密かに近寄りて切なる思を打明けしも却て忠綱の爲に痛く辱められしかば深く忠綱の無情なるを恨みて遂に之を殺さん事を企つるに至り適ま義兼政務の爲に鎌倉に滞留する事となりしかは藤野大に喜ハ義兼の恨を報ゆるは此時なりとて義兼の室侍千(北條時政の二女)を勸め忠綱と共に宴々庭前に張る時恰も彌生の頃にして四方の秋色もいと長閑なれば時子も心浮立ちて此所彼所を散步せしに深園に宵らし身なれば大に疲勞を覺へ藤野をして水を索め來らしむ藤野其奸計の成れると喜ひ怪しき泉

の水を汲み來りて之を勧めしに毒などの混し居りしにや遂かに腹痛を覺へ奇なるかや腹部漸次腫滿して恰も妊娠せる者の如くなり醫療如何に手を盡すも治せざり其翌年正月義兼鎌倉より歸り時子の腹部を見て大に怪しみ侍女共に故を問ふ藤野答へて曰く之れ昨春以降忠綱と通するの結果なりと義兼大に怒り將に忠綱を殺さんとす忠綱恐れて夜密かに脱れ去る義兼憤激ハと遣して之を追ふ忠綱走り彦間村の山中貝澤村(或は峽澤に作る)に至りしも追兵頗る急なりしかば其脱すへかざるを知り遂に自殺す後義兼其藤野の處に出でし者なるを知り大に悔悟して一祠を此所に建てて以て其靈魂を祀れり今の忠綱神社と稱ふる神社即ち是なり云々

▲藤姓足利氏系譜
藤原秀郷六世之孫

兼行 從五位下源名大夫上野國源名領主

成行 從五位下足利大 成綱 足利太郎早世 夫

師任 澤殿四郎與余吾將軍平惟茂合戰而討死
行房 佐貫太郎上野國住人佐貫市部大輔光景家督改名光繼

家綱 足利八郎大夫左馬助又號安蘇大夫實成行之二男也

俊綱 從五位下足利太郎治承五年為家臣桐生六郎牛害

成俊 佐野庄司次郎元潛甲辰十二月二十五日卒法名七寶義觀號東野寺殿

郷綱 深栖三郎

成次 利根四郎

隆綱 山上五郎

成實 園田六郎

有綱 戶矢子七郎佐野。阿曾沼。木村等之祖也

忠綱 中務丞田原又太郎治承四年之合戰宇治川七陣于時年十七歲其終本詳

忠廣 孫太郎移住伊勢郡三重郡赤堀號赤堀太郎承久三年之亂屬官軍戰死

藤姓足利氏滅亡の後ち當城は上總介義兼即ち源姓足利氏の居城となり爾來子孫相襲て之れに據れり義兼六世の孫尊氏元弘建武の風雲に乘し一族を率ゐて京都に上り遂に南北兩朝の戰亂となりて三世執權に至りて海内を統一して子孫十三世征夷大將軍たりし事蹟は史上に詳かなるを以て茲に省畧す
△源姓足利氏系譜
源兼家之三男義國之二男
從四位下足利陸奥守藏人判官内外殿母信濃守有房之女
保元二年丁丑五月廿九日卒年三十一

義康 從四位下足利陸奥守藏人判官内外殿母信濃守有房之女
保元二年丁丑五月廿九日卒年三十一

義清 矢田判官從木義仲於備中水島討死仁木。細川大輪之祖

義房 足利判官征源三位頼政於宇治川討死

義兼 從四位下足利上總介母熱田大宮司季範之女實録西八郎為朝之
男正治元年己未二月八日卒號鏡阿寺殿

義氏 正四位下左馬頭陸奥守治部大輔母北條遠江守平政之女建長六年甲寅十一月二十一日卒法名正義號法樂寺殿年六十六歌人也

義頼 桃井次郎桃井之祖

長氏 足利上總介吉良。今川等之祖

泰氏 正五位下宮内大輔左馬頭母北條武藏守平泰時之女文永七年庚午五月十日卒法名阿彌智光寺殿

家氏 從五位下尾張守大夫判官又太郎斯波之祖

頼氏 從五位下治部大輔初名利氏母北條修理亮中時氏之女法名義仁號吉祥寺殿

義頼 三郎澁川之祖

頼茂 四郎石堂佐々木等之祖

公深 律師一色之祖

家時 從五位下伊豫守式部大輔母上杉左衛門尉藤原重房之女法名義忠號報恩寺殿

貞氏 贈從二位讚岐守母北條左近大夫平時茂之女元弘元年辛未九月五日卒法名義觀號淨妙寺

正二位權大納言征夷大將軍贈從一位大政大

足手郡

藤姓足利氏滅亡の後ち當城は上總介義兼即ち源姓足利氏の居城となり爾來子孫相襲て之れに據れり義兼六世の孫尊氏元弘建武の風雲に乘し一族を率ゐて京都に上り遂に南北兩朝の戰亂となりて三世執權に至りて海内を統一して子孫十三世征夷大將軍たりし事蹟は史上に詳かなるを以て茲に省畧す
△源姓足利氏系譜
源兼家之三男義國之二男
從四位下足利陸奥守藏人判官内外殿母信濃守有房之女
保元二年丁丑五月廿九日卒年三十一

義康 從四位下足利陸奥守藏人判官内外殿母信濃守有房之女
保元二年丁丑五月廿九日卒年三十一

義清 矢田判官從木義仲於備中水島討死仁木。細川大輪之祖

義房 足利判官征源三位頼政於宇治川討死

義兼 從四位下足利上總介母熱田大宮司季範之女實録西八郎為朝之
男正治元年己未二月八日卒號鏡阿寺殿

義氏 正四位下左馬頭陸奥守治部大輔母北條遠江守平政之女建長六年甲寅十一月二十一日卒法名正義號法樂寺殿年六十六歌人也

尊氏 臣母上杉修理亮藤原頼重之女從二位藤原清子延文三年戊戌四月二十九日薨五十五名仁山妙義大相國號等持院殿

直義 從三位左兵衛督左馬頭母同上觀應三年壬辰二月廿六日依病薨法名故山惠游號大休寺殿

義隆 正二位權大納言征夷大將軍贈從一位左大臣母赤橋武藏守牛久時之女從二位平登子貞市六年癸卯十二月七日薨年三十八法名瑞山道惟號寶篋院殿

基氏 從三位左兵衛督左馬督母同上貞治六年癸卯四月二十九日薨中二八法名玉岩道所號瑞泉寺殿叔父山崎為納子孫代々住鎌倉而稱關東公方喜連川牛實宮原等之祖也

足利氏去て後ち當城は其主數々更迭して天正年間に至り小田原北條氏の部下長尾但馬守顯長當城主たりしかり同十八年小田原の役に北條氏と共に滅亡せり徳川氏の世に及びて寶永二年戸田大炊頭忠利當城に封せられ一萬千石を領せしより子孫累世居城して明治維新に至り版籍奉還の後廢城せり

▲舊足利藩主戸田氏系譜

戸田因幡守忠徳三男

藤原忠利 戸田大炊頭

忠固 大隅守

忠位 女書山貫守

忠言 長門守

忠如 大隅守

忠喬 大隅守

忠祿 長門守

忠文 大炊頭。實同姓山城守忠温四男

忠行 長門守。貴族院議員正四位子爵

忠雄 從五位

●足利學校 古來より人口に膾炙せる足利學校は當時にあり其古へは海内の學生を負ふて來り學ぶ者尠からず當時春秋釋奠の祭を施行し盛儀莊嚴人目を驚かせしか南北朝以來群雄四周に轉據し干牙倥傯人の顧みる者なく僅かに浮屠氏に依りて一縷の命脈を維きて衰運に傾きしか當時幸ひに管領上杉憲實力を盡して足利學校の經營に力を致せしを以て今猶名残を視るを得るなり現今有志相圖りて當校を圖書館となし永遠に保存するの計畫中なりと云ふ

足利學校沿革概畧 足利學校へ原ト下野國都賀郡國府野ニアリ(足利學校書籍目録、鎌倉大草紙ニハ所在ノ地名政所トアリ

蓋シ政所へ國府野ノ別稱ナリ今ノ惣社村室八島ノ隣村ニ國府村アリ故ニ其地ヲ稱シテ政所トモ云ヒシナルヘシ(足利、校事蹟考)創建年代來由共ニ詳カナラズ或ハ昔時國學ノ遺制ナリト云ヒ(上杉安房守憲實狀文、本朝通鑑、日本教育史畧、足利學校事蹟考)或ハ小野篁ノ建設スル所ト云ヒ(鎌倉大草紙王代一覽、和漢二才圖會、國史畧、足利學式、足利學校書籍目録、山吹日記、提醒紀談等ニアリ)又ハ足利義兼ノ勅置トシ(義兼ハ義康ノ子ニシテ北條時政ノ女婿也分類年代記、東海談)足利尊氏ノ草創トシ(上野野名跡考)藤原秀郷曾孫ノ建立トスルガ如キ(上野傳説雜記 諸説一ナラス然レモ皆正史ニ明證ナシ元弘建武ノ後チ爭乱相踵ギ始ト寧歲ナク學業大ニ荒廢シタリシヲ貞和申左馬頭足利基氏關東管領タルニ及ヒ再ヒ之ヲ興隆ス(鑿阿寺舊記、教育史畧)應永元年長尾景久學校ノ地ヲ足利郡足利郷ニ相シテ之ヲ移ス(鎌倉大草紙、此地今ノ學校所在地ニ非ス足利驛ノ東岩井村ノ境ニ今學校地先ト字スル所アリ即チ其地ナリ(事蹟考 永享十一年上杉憲實管領タルニ當リ足

利ハ其村内ニ在リヲ且京及鎌倉兩公方名字ノ係ル地ナルヲ以テ特ニ學校領ヲ寄進シ數部ノ書籍ヲ明國ニ募リテ之ヲ納附シ鎌倉圓覺寺ノ僧快元ヲ聘シテ序主トシ久廢ノ業ヲ興シ序主舊ヲ修メテ大ニ學徒ヲ教授セム快元ハ材幹アリ其學徒ヲ教フルコトニ備者ノ如ク其職ヲ盡シ以テ學校中興ノ祖タリ(大草紙、書籍目録)憲實ノ子憲忠其子憲房庶ク父祖ノ志ヲ紹キ兵馬擾攘ノ際ニ當リ仍能ク心ヲ文學ニ盡シ校舍ノ規模大ニ備ル當時文教大ニ衰ヘ修學ノ志アル者此學校ノ外他ニ憑ルヘキ者ナキヲ以テ學徒ノ笈ヲ負ヒテ至ル者東西相望ム(柳庵隨筆、教育史畧)後序主數代ヲ經テ第七世九華ニ至ル九華名ハ瑞峽一ニ玉崗ト號ス(書籍目録)此時代ニ學校ヲ今ノ所在ノ地ニ移ス蓋シ渡良瀬川洪水ノ事アルニ因ル年代詳ナラザレトモ足利興廢記ニ據リテ按スルニ永祿年間ノ事ナラン(事蹟考)第八世宗銀ヲ經テ第九世因室ニ至ル因室名ハ元信一名三雲世ニ信長老ト稱ス奇才アリ内外ノ學ニ通ス德川將軍家康ニ譽絶セラレ常ニ其左右ニ侍シ

テ顧問ニ應ス學田百石書籍二百餘部活字板數萬顆ノ
寄附アリ(書籍目錄)近藤守重カ右文故事ニ引タル伏
見圓光寺ノ由緒書ニ據レハ此書籍ト活字板トハ伏見
學校ノ師範職タリシニ依リ即チ之ニ下附セシナリ而
シテ彼ノ由緒書ニハ植字判木十萬字餘トアリ此活字ニ
テ刊行セシモ孔子家語貞觀政要七書ノ類數部アリ
又白銀若干賜フテ廟宇ヲ修營ス第十三世傳英ノ時
ニ至リ廟宇漸ク破壞スルヲ以テ信長老ノ舊ニ依リ修
營フ官ニ請フ官之ヲ允シ寛文八年銀若干賜リテ廟
宇ヲ修繕ス是時大名旗本等ヨリ書籍祭器ヲ寄附スル
モノ多シ(書籍目錄)享保十三年徳川吉宗日光廟參拜
ノ歸途此學校ニ過リ其藏書ヲ見テ大ニ之ヲ貴重シ修
補ヲ加ヘ書籍ヲ寄納シ以テ之ヲ保護セシム爾後漫ニ
人ノ涉覽ヲ許サス此時ノ庠主ハ第十六世月江ナリ
(教育史畧)江學校ノ中興以來庠志譜牒散乱シテ統
紀ナキヲ憂ヒ百方考察檢究シテ之ヲ輯録ス年譜事歷
概カニ緒ニ就クヲ得タリ寶曆四年四月二十三日雷方
丈ニ震シ庫裏ヲ併セテ災ニ罹ル安永七年官命シテ聖
廟門廡ヲ修營シ方丈庫裏ヲ再建ス(書籍目錄)寛政五

監督ヲ慎ミ永世保護ノ方法ヲ設クシム同十四年五月
内務省ヨリ該學校保存資金トシテ古社寺保存費ノ内
金千圓ヲ下附シ尙畜積方法ヲ計畫シテ上申スヘキ旨
ヲ栃木縣ニ令ス此命令ノ旨ニ應シ同十五年八月地方
有志者相謀リ先ツ聖廟ヲ修繕シ圖書ヲ補埋シ文庫ヲ
再建シ書籍縱覽所ヲ設ク春秋二仲ノ祭ヲ興ス等ヲ始
メントシ終ニハ漢學書院ヲ建設シ古來ノ遺緒ヲ繼續
セントノ見込ヲ以テ保護委員ヲ定ム(栃木縣申報其
他ノ記錄)
聖堂ノ制。外ニ靈星門アリ名ケテ入徳ト云フ其中門
ニ學校ト書シタル扁額ヲ掲ク明人蔭龍溪ノ筆ナリ廟
門名ケテ杏壇ト云フ重檐兩階四丈ニノ方ニ對幌兩楹
歩廡後廊アリ聖像ハ三尺許ノ坐像ニシテ其帽ハ幘ノ如
シ原ト右手ニ羽扇ヲ執リシヲ今ハ羽扇ヲ撤シテ手ノ
狀ヲ改メタリ左右ニ顏曹思孟ノ木主アリ其左方ニ別
室ヲ設ケ小野篁ノ木像ヲ安ス正冠黒袍ノ坐像ナリ堂
傍ニ文庫アリ機杼象樽爵盤等ノ祭具及諸器ヲ藏ス皆
舊傳ノ寄品ニシテ其内最モ珍異トスヘキハ瑪瑙ノ琴
臺ナリトス(漫遊文章、下野園誌、教育史畧、事蹟

年十一月釋奠釋菜ノ兩式及ビ時習館學規學則職掌等
ヲ定ム時習館ハ生徒修學ノ處即チ學寮ノ名稱ナリ
(足利學式時習館ノ稱呼何レノ時ニ起レルヤ詳ナラ
ス)享和二年官命シテ廟宇ヲ修營ス今日現存ノ堂宇
ハ蓋シ此時修營セシ者ニ係ル(事蹟考)明治元年大政
一新ニ際シ足利藩主戸田忠行名蹟ノ久敷洋屠氏ノ手
ニ歸シテ衰頹ヲ極ムルヲ憂ヒ建言シテ再建ノ事ヲ請
フ依テ委任ノ命ヲ受ク是ニ於テ第二十世ノ庠主謙堂
ノ職ヲ解キ更ニ求道館ト稱シ校則ヲ掲ケ放職ヲ置キ
士民ヲ教授シテ曾テ藩費ニ歲セル書籍ヲ寄附シ又在
來ノ圖書ヲ修補シ且釋奠釋菜ノ舊儀ヲ復シ頗ル前日
ノ面目ヲ改タム乃チ紫縮緬菊章ノ幕一張、白麻二張
ヲ該學校ニ下賜セラル同五年縣治改定ノ際聖廟ヲ始
メ圖書器具等總テ足利縣ヨリ栃木縣ヘ交附シテ學校
ヲ閉鎖ス同九年三月栃木縣ヨリ更ニ古書籍古文書等
ヲ該學校ニ下附シ學校所在地ノ正副區長戶長及學區
取締ニ令シ嚴ニ保護セシム同十三年内務省官吏ヲ派
遣シテ該學校所藏ノ書籍ヲ調査シ同年七月同省特ニ
栃木縣ニ令シテ學校ノ遺蹟及之ニ屬スル古書籍類ノ

考)内最モ不世ノ珍トスヘキモノハ三十八部ノ書ニ
シテ其内珍トスヘキハ宗板ノ五經ナリ尙書、毛詩、
禮記、左傳ノ四書ハ上杉憲賢ノ寄進スル所ニシテ周
易ハ其子憲忠ノ納附スル所ナリ(山吹日記)
學校舊領ノ地ニ拾貳氏アリ大手、神田、細内、宮本、
阿部、木村、龜田兩家、石内兩家、牧野兩家ナリ相
傳ヘテ小野篁ニ隨從シ來リシモノ、後裔ナリト云フ
然レトモ此說亦古書ニ徵證スヘキモノナシ唯幕府ノ
時ニ於テ學校領ノ内ヲ以テ此十二氏ヲ賑救シ來レリ
是レ蓋シ其學校ニ因故アルヲ證スルニ足ルヘキ歟抑
貳氏ハ今仍其地ニ存在セリト云フ(事蹟考)維新ノ前
ニ於テ庠主タル者禪家ノ長老ヨリ之ニ任ス徳川幕府
ニ於テ獨禮ノ格ヲ有シ毎年歲首參賀ノ爲メ出府シ年
筮ヲ將軍ニ呈ス(年筮トハ一年ノ吉凶ヲトセシモノ
ナ云フ)又足利藩主ヘモ年々歲旦ニ同シク年筮ヲ贈
リシト云フ(事蹟考)快元和尙中興ノ業ヲ開キシヨリ
庠主ノ世代ハ左ノ如シ
第一世 快元 文明元年四月卒
第二世 天矣 延徳年間二月卒

- 第三世 南計 不詳
- 第四世 九天 永正年間六月卒
- 第五世 東井 名ハ之好吉川氏大永年間三月卒
- 第六世 文伯 年代不詳七月卒
- 第七世 九華 名ハ瑞嶼九華ト稱シ又玉岡ト號ス大隅伊集院氏ノ支族天正六年八月卒
- 第八世 宗傑 年代不詳十月卒
- 第九世 閑室 名ハ元信一名三聖世ニ信長老ト稱ス慶長十七年五月卒
- 第十世 龍源 名ハ禪珠、寒松、鐵子等ノ號アリ寛永十三年四月卒
- 第十一世 明徽 名ハ祖徒、睦子ト號ス寛文十二年四月卒
- 第十二世 澤雲 名ハ祖兒、元祿三年十月卒
- 第十三世 傳英 名ハ元敬、外子ト號ス貞享四年三月卒
- 第十四世 久室 名ハ元嬰、琢子ト號ス茂木氏

- 第十五世 天叔 正徳三年十二月卒
 - 第十六世 月江 名ハ元倫、篤郊ト號ス栗原氏享保十年正月卒
 - 第十七世 千溪 名ハ元澄、淳子ト號ス寶徳五年卒
 - 第十八世 青郭 西堂不詳
 - 第十九世 太齡 不詳一曰實殿
 - 第二十世 松嶺 不詳
 - 第二十一世 謙堂 明治元年庠主ヲ解カル
- (再籍目錄、取蹟考)
- 寛政五年定ムル所ノ時習館學規ハ三章ナリ其一ニ曰
 論語孟子ヲ先ニシ詩書諸經ヲ修メ夫ヨリ歴史ニ涉リ
 專ラ人倫日用ヲ本領トシ侯其餘博覽詞章義事ノ類其
 才力ニ隨ヒ何分可心應事其二曰德行ヲ本トシ才藝ヲ
 末トシ實用ヲ務メ無用ヲ省キ侯事其三曰平常親切ヲ
 宗トシ高遠奇僻ヲ戒メ總テ不可求捷徑事。其學則ニ

ハ訓導ノ權限、學寮ノ取締、聖堂ノ參拜、圖書閱覽
 等ノ事ヲ揭ケ末條學校ノ由緒ヲ説キテ人倫日用ノ事
 ヲ講明シ風化ヲ贊ケテ國恩ニ報スヘキ旨ヲ述ベ同時
 ニ定ムル所ノ時習館職ハ訓導以下八職ナリ(一本司
 掃ヲ加ヘテ九職トス)曰ク訓導、人材教育ヲ主トシ
 學業ノ事及學寮取締一切ノ事務ヲ總管ス曰ク司講、
 講義訓諭ヲ掌ル曰ク司監、學寮ノ非法ヲ督ス曰ク司
 籍、圖書典掌ス曰ク司客、賓客及外來生ニ應接ス曰
 ク書記、文書記録ノ事ニ從フ司器器諸具ヲ管ス曰
 ク司計、財用ノ事ヲ掌ル

此學規學則並ニ職掌等ニ依リテ察スルニ當時内ニ
 ハ學生アリ外亦賓客遊學者等アリテ專ラ文教ニ從
 事セシコト知ルヘシ然ルニ其後學田水害ノ爲ニ欠
 減シ幕府ノ末ニ至リテハ管ニ學徒ヲ養ヒ難キノミ
 ナラス竟ニ學寮ノ体裁オモ保護スルコト能ハスシ
 テ僅カニ餘喘ヲ浮屠庵室ノ如キ形狀ノ間ニ存セシ
 ノミ

文字讀む能はず古老の口碑に小松内相平重盛遺言
 して曰く我死せば遺骨を日本六十六ヶ國に分葬し
 墳墓を建立せよと此墓は即ち其一なりと云ふ

●**鏝阿寺** 當寺は往古足利の別業と稱し鎮守府將
 軍源義家下野守たりし頃之を足利の庄に置かれ其三男
 にして新田及足利氏の祖たる式部大夫義國始めて此に
 居る其子陸奥守判官義康父の後を承け氏を足利と稱す
 其子上總介義兼北條氏ヲ娶りて左馬頭義氏を生む賴朝
 の伊豆に起るや往て之を佐け大に功ありしが後家難に
 遭遇して棄世の念深く後鳥羽天皇の御宇建久七丙辰の
 年遂に佛門に入り鏝阿と號し源姓數代の居城たりし別
 業を以て梵園となし大日知來の像と佛師運慶に彫刻せ
 しめて本尊とし七堂伽藍を草創して其名を以て寺號と
 なし自ら此に住す爾來七百年の風霜を閱みするも未だ
 會て天災地變の侵す所とならず堂塔依然として舊觀を
 失はず東西の唐居數門の如きは別業の遺物にして古色
 蒼然自ら當時を追懷せしむるに足る以上の如き由緒あ
 るを以て御歴代皇室の勅願所となり御恤物及御下賜金
 等あり左馬頭義氏讚岐守貞氏征夷大將軍尊氏關東管領

●小松内府重盛の墓

當町の東北小松山萬徳
 寺の境内にあつ五輪形の石塔にして蘇若碑身を没して

足利持氏等の寄附せられたる寺領は下野七邑の外武藏の戸守郷長州下の關を有せしも天正年間戰亂の爲め皆滅没に歸せしかは同十九年徳川家康公より更に寺領六十石除地五萬坪を寄附せらる又元祿五年桂昌院尼公よ黄金二百兩の寄進あり明治四年九月寺領を上地し同二十一年五月内務省より保存金として二百圓を下賜せらる

當寺は特に足利氏及源姓に縁由ある北條、新田、岩松、島山、横瀬、細谷、細川、吉良、斯波、澁川、今川、佐野、上杉、長尾、古河、千葉、小山等の名門名將の寄贈せる佛像佛具繪畫刀劍織物陶器寄進狀宛又制札禁制古記録等今猶存せり

●郷社八雲神社 祭神は素盞鳴尊、稻田姫命の二柱なり當社は明治維新の際古記悉く散逸したるを以て其創立年月詳かならざれども古來の口碑には清和天皇の御宇貞觀年間國主從五位下野守藤原村雄靈夢に感じ始めて社殿を建立したりと傳ふ然れども爾來如何に推移したるか更に知る能はず而して現今の社殿は天保年間改築にして其規模大ならざれども結構巧緻にし

て頗る壯麗を極む祭典は毎年七月廿日より三日間にして今猶神輿渡御に古式を用ゆるを例とす本社は市街の中央に位し一大石華表を入れは其傍に銀杏の老樹あり枝葉繁茂天日を覆ふ境内は老杉稚松鬱蒼として翠綠掬すくし社背は澗溪たる小流を隔て岡巒あり機神山と云ふ山上の眺望絶佳にして渡良瀬川の流ば帯の如く近山遠峰と相待て山水の風光頗る優美なり

●足利八雲神社 祭神素盞鳴尊、奇稻田姫命、惣社 大己貴命、抑當社の濫觴を按ずるに今を距ること千八百三十三年景行天皇の皇子日本武尊東夷征討凱旋の途次當地を過り此地は毛野國の中央なりと宣玉ひて出雲國清の大社の祭神たる三神を勸請鎮座ありしを草創とす後敏達天皇の御宇東國疫癘猖獗を極めしかは萬民大に恐怖し當社に祈請を凝して利生を得たりと云ふ人皇五十六代清和天皇貞觀十年再々東國に疫癘流行し天死するもの甚だ多し時に國守從五位下野守藤原朝臣村雄一夜靈夢に依りし奇稻田姫命の宮を別殿に祀り之を下の宮と稱す今の郷社八雲神社是なり此趣き上間に達し右大臣經原基經卿の下知を奉し爾來上下の兩宮と

稱す當時官幣及儀式調度の爲假殿を建られし古跡猶存し借宿村と名く其後朱雀天皇の御宇承平年中平將門下總に據りて叛するや貞盛秀郷戰捷を當社に祈り貞盛は鳴鶴の矢秀郷は太刀一振を奉獻す天慶三年將門と戦ひて平定の功を奏するや時に當社を尊崇すると深く神馬及び瑪瑙の鞍を奉獻あり時俗之を呼んで白鞍と稱す祭禮舉行の時此鞍を渡良瀬川に洗淨するを例とす因りて其處を白鞍の淵と云ひ今は八幡村に属す人皇七十年代後冷泉天皇天喜五年源賴義朝臣安倍頼時を征討の節及び康平五年其子貞任宗任征討の節共に當地を本陣とし當社に戰勝の祈願ありき其後堀川天皇の御宇寛治五年源義家朝臣清原武衡家衡征討の爲め發向ありし時利佐太郎太夫基綱の館を本陣と定め乃ち當社に參詣し祈願する所あり凱旋の途次復ひ基綱の館に入り其息女を娶り一男を擧ぐ是を義國と云ふ近衛院の久安年中義國足利へ下向し住居するに及んで當社を足利梁田兩郡の惣社となす太刀一振三騎武者其外神具等を奉納あり其後足利十二代將軍義持公より薙刀の奉納あり天文五年八月五日同祿の災に罹り社殿寶物盡く焼失せしも義國公

足利郡

より奉納の太刀一振足利二代將軍より奉納の薙刀は今猶存せり其後東山天皇の御宇元祿九年領主本庄因幡守より神鏡の奉納あり明治維新以前は領主戸田家代々當社を崇敬し除地二町餘の寄附ありき明治十年四月三日舊社地より現今の地へ遷座せり

●示現稻荷神社 祭町にあり倉稻魂命を祭る當社は寛政年中祝融の災に罹りて社殿古記録盡く烏有に歸し其創立年月更に詳かならず然れども口碑及維新前に於ける境内樹木の鬱蒼たりし光景に徴するも既に數百載此所に鎮座ありしものなるや窺ひ知るを得へし明治元年故ありて他に遷座せしも信徒深く感ずる所ありて後日舊境に奉移し社祠を造營せり之れ即ち現今の社殿なり又當社には往昔より靈狐出現して信徒に種々の教誡を示す事あり蓋し示現の稱及境内の丘陵を示現塚と云ふは之か爲めなり明治十年十一月十五日の夜靈狐社頭に現われ未來の事を教示せしとあり爾來里人益之を信仰し賽者常に絶へずと云ふ

●法立寺 智願院帝釋山と號す淨土宗に属す當寺の開山は寂蓮社照譽上人芳陽和尚なり往昔屢々祝融の

災に罹りて古記録盡く島有に歸せしかは其創立年月及沿革史に詳かならず承安年中島山重忠之を中興開基せしも適重忠北條氏の爲に滅亡せしにより寺運も亦大に衰微せり後本郡の領主足利義兼の三男新田義純其古刹にして草莽中に埋没するを惜み更に再建せしも爾來歲月の久しき敗度の火災に罹りて殆んど崩滅に歸せしを以て寛文四年明治十八年三月十四日兩度の火災に堂宇盡く島有に歸し明治二十一年莊嚴なる堂宇を再建し以て今日に至れり

●權現堂 福聚山福泉寺と號す天台宗にして當町大字助戸にあり當寺の傳に曰く元久二年の創立にして地藏上人の開山なり上人は紀州那智郡の人にして一夜夢に異形の人來りて告て曰く吾の汝と共に日本六十餘州を巡回して六十六部の妙典を各靈場に納めん且汝終焉の地に吾を奉せよ吾は是れ熊野權現なりと曰ひ終りて烟の如くに消へ失せたり上人奇異の思ひをなし直ちに諸國巡回の途に上り本郡に來りて其勝地をトし一字を建立す即ち是れ當寺なり又靈夢に感得して權現堂を創建せり爾來法統連綿として永祿十一年に至り十八世

舜榮修築す之を中興開山とす當時足利義榮公の歸依する所となり寺運盛なりしか其後屢の火災にて假本堂の儘なりしか文化元年漸く再建し以て今日に至れり云々

●三寶院 足利町七丁目にあり淨土宗にして供養山清水寺と號す當寺は延應元年の創立に係り開山は舜智上人なり往古は今の境内の前面にありしか屢火災に罹りしを以て寛文二年終に現今の地に移れり又當寺は中古足利家の歸依篤く隨て寄附物多かりき故に現在の什寶には悉く足利家の定紋たる◎の紋所あり

◎毛野村

- 區劃 山川 勸農 岩井
- 北猿田 常見 大久保
- 八 柵 鷗 木 大沼田
- 川 崎

●小野寺支城址 大字川崎の南字上町にあり方形にして東西一町三十間南北二十二間東西北の三面には濠堀猶存し南一面は渡良瀬の激流を帶ぶ以て當時の

要害堅固なりしを知るへし當城は建久年間下都賀郡小野寺の城主通綱の築く所にして其子治郎道業として之を守らしめ小野寺城の支城として敵に備へしなり後十三世景綱の時足利の城主長尾顯長と共に小田原北條氏に属し天正十八年滅亡して廢城せり

●岩井砦址 大字岩井の山上にあり天正年間足利の城主長尾顯長の家臣白石豊後守淵名上野介の據りし所なりと云ふ

●白石館址 同村にあり文明年中白石左京大夫入道道海に居りし所にして後天正年間白石豊前公の時に至りて荒廢に歸せり

●海老塚 大字山川に在り高さ三丈周圍八十間南方に巨孔あり入口は方四尺進むと八間餘にして廣一丈高さ七尺の暗室に出つ左右兩壁は大石を重疊して構造せり古代の墳墓か或は太古穴居の遺跡なるへし

●長林寺 大字山川にあり福聚山長林寺と號す曹洞宗に属す當山の創立は後土御門天皇の御宇明應八年十月にして常陸國河内郡小菴郷の領主岡見右近將監の開基にして開山は上野國北甘樂郡小橋村大字藏寶積寺

の第二世天助高順和尚より開基の法號東林院殿竹叟覺公大庵主と稱するに因て寺號を金剛山香華院東林寺と名けたり天文十九年將軍足利義輝公開山禪師(上杉家の苗裔里見氏の縁族)を歸依して寺領永二十貫文の寄附狀并に制札下馬札等を下賜せられ天正十九年九月七世源室永高和尚の代徳川家康公關東を統轄するに際し更に二十石の朱印地を寄納ありたり當時門前百性十三戸を有し寺門頗る隆盛たりしか維新以來舊時の觀に及ばずと雖も法燈絶ゆることなく現住に至る茲に二十九世を経たりと云ふ

●龍雲寺 大字大久保にあり曹洞宗にして明鏡山龍雲寺と號す延享二年及享和二年兩度の火災にて記録概ね焼失し創立の年代不詳なれども往古は天台宗にして藥師寺と稱し世々島山家の菩提院にして關東の戒壇所たり然るに後年廢頽に歸せしを承和の頃臨濟宗建長寺大拙和尚之を中興して爾來般若寺と稱せしか永祿年間再び衰頽して將々瀕滅せんとせしを領主松平出羽守か田沼町元性院を當山に移し同寺の六世的翁和尚を招して天正年間佛蓋を造營して曹洞宗となし永六貫文

の寺領を寄附あり始めて龍雲寺と改稱せり慶安元年徳川將軍家光公より寺領を朱印地と改めらる而して本寺は遠州榛原郡高尾の石雲院にて大宥派の門主たり目下末寺五ヶ寺を有せり寶物大般若寫本六百卷其他數種あり

◎富田村

區劃 奥戸 迫間 駒場 寺岡

西場 稻岡 多田木

●西場城址 大字西場にあり昔時足利次郎太夫家綱の男西場小太郎成實の築くにして爾來子孫相襲さしか文明年間十一世の孫右近太夫某故ありて當國下都賀郡藤岡の篠山城に移り其臣出井新左衛門保足惣十郎佐矢重藏等をして之を守らしめしか天正五年四月足利の城主長尾と戦ひ落城して廢墟に歸せり

●只木砦址 大字多田木にあり往昔只木圖書なるもの之に據り永正年中只木次郎義房に至りて廢城せりと其事蹟は傳ふる所なし

●石尊の瀧 富田停車場を距る北方二十餘町字

西場山麓のあり瀧は山上より三層となりて落下す此瀧甚だ大ならされども往來に便なるを以て炎暑の候來浴するもの多く傍らに數軒の茶亭ありて休憩に便す山中奇岩怪石ありて其岩壁に大小の二文字を顯はす里人之を石尊と稱し參拜する者多しと云ふ

◎吾妻村

區劃 村上 上羽田 下羽田 高橋

●龜ヶ井館址 大字羽田に在り往昔龜田伊賀守政綱なる者始めて此所に居住し爾來文明年間左兵衛宗重に至るまで相續せりと云ふ其事蹟詳ならず

●龍江院 大字上羽田にあり曹洞宗中本寺格なり傳に曰く當院は今を距ると殆ど四百餘年前即ち明應三年水戸八十萬石の領主佐竹越後守義輔卿が其嚴父遠江守義定公の爲め水戸城内に開創せし名藍にして開山は實に秀峰存岱和尚なりとす傳へ云ふ千波浦の龍神化し來りて和尚の示誠を蒙り大戒を受け歡喜して寶珠を擎く因て寺を龍江院と稱せるなりと開山存岱和尚は模庵宗範和尚の法嗣にして寶徳二年三月十八日に誕生あり

夙に宗範和尚に投して業を受け後一休禪師に紫野大徳寺に參じて大に得所あり道譽宗内に喧しく和尚が當院に住せられたるは實に四十有五歳の時なりと住するこ

と三歲同曆六年相州小田原の大雄山最乗寺に昇住して大に家風を宣揚し越て永正三年即ち五十有七歳にして宗門一般の品評に據り我大本山永平寺に昇住し高祖下弟十世の法席を薫され翌年十一月二十一日參圓して後柏原天皇より大功正傳禪師の勅號を賜はりぬ茲に於てか道譽海内に普く傘松峰頭高く高祖の遺風を顯彰することを待たるは全く禪師の賜なりと謂ふへきなり斯くて享祿元年春師は永平寺を退休して再び當院に飯錫あり居ると一歲翌年四月五日淹然として大寂せられぬ時に齡八十八歳依て遺弟等相圖て塔を域内に建てて以て其徳風を追慕す其後星霜推移して門風大に振ひたりと雖も慶長七年城主但馬守義宜卿は事によりて秋田に改易せ

らるゝに方り十二世玄芳和尚は城主と訣別し自ら開山の木像所傳の法寶等を捧持して野州間々田村に至り不動堂に住し後開院して龍昌寺を開き又更に錫を轉して同州免島に至りて一字を開創して龍興寺と名く同曆十

八年牧野伊豫守成重師の徳風を慕ひし知行内羽田に於て貞昌寺の舊蹟に一字を建立し和尚を屈請して住持たらしめ以て同家代々の香華院となしたり云々

●雀宮神社 大字高橋にあり村社なり豊城入彦命を祀る當社は崇徳天皇の御宇天承元年の創立なりと傳ふれども古記録湮滅せるを以て其月日は知る能はず元和年正月新井正規と稱する人起て神職となるや大に社殿を改修して境内を清淨し社運を再興し爾來子孫相襲きて神職となれり明治二年一月十八日其子孫正善家を嗣ぎ銳意氏子を誘導して葬儀を悉く神葬祭に改めしめたり祭典は毎歲三月十三日九月廿九日を以て執行す

◎北郷村

區劃 菅田 利保 江川 月谷

田島 名草 大月 樺崎

●足利義兼の墓 本村大字樺崎の西方赤坂八幡山麓に五輪の石塔二十一基あり里人傳へて云ふ之れ足利義兼及其家臣の墳墓なりと雜苦文字を埋めて氏名年

月共に詳からず

●長途路川の櫻 大字大月の東北長途路川沿岸の堤上に七百五十餘株の櫻樹あり里俗土手櫻と呼ぶ春陽駘蕩の候觀花の客群集し堤上立錐の地なしと云ふ

●村社示現神社 大字樺崎にあり大已貴命、事代主命豊城入彦命の三神を合祀す當社は其創立年代詳かなりす日碑に傳ふる所に據れば延暦三年の創立にして現今境内にある大樹は當時栽植せるものにして往昔より神木と稱く來りしなりと當社の祭神は赤子を愛すること殊に深く昔日より子なきを苦むの人一度來り賽すれば必ず靈驗ありと云ふ曾て藤姪堀某なるものあり當社に祈りて一子を設けしかば其神徳無窮なるに感泣し乃ち社殿を再建して益之を崇敬せり之れ實に享保二十一年の事なりと爾來世人皆正一位示現大明神と稱へ賽者常に群集す明治維新の後村社に列し示現と改め毎歲三月十九日九月十九日を以て祭祀を執行す

●八幡宮 同字にあり譽田別命、赤土命、の二神を祀る當社の創立由來を釋ぬるに桓武天皇の後胤たる長六郎兵衛の爲懷承和五年九月二十九日郷内の守護神

●行道山淨因寺 大字月谷にあり同所字菅澤より登ること三十町にして頂上に達す海拔千二百九十尺巖壁聳峙し登山頗る困難なり山中は幽邃にして風光絶佳仙境に入るの思ひあり山頂に淨因寺あり阿彌陀如來を本尊とす寺傳に曰く當山は人皇四十六代孝謙天皇御宇天平勝寶元年行基菩薩の開創にして弘法大師を第二世とし天台宗眞言淨土禪四宗兼學の道場にして大凡六百年間世々の高僧輪住す實に今を距ること一千百有餘年の古刹なり中古藤原秀卿十四世孫結城光氏の男團田太郎光貞佛門に入て法徳禪師と號す永和元年當山に登り之れ吾が行道の地なりと稱し臨濟の宗を定む是を當寺の開祖とす時の將軍足利義滿の歸依篤く應永二年七堂伽藍の建立あり爾來徳川氏に至るまで曆代武將の御朱印を賜はり修繕維持の資に供し法燈連綿として關東四ヶ道場の一たりしか維新の後寺廢悉皆土地となり明治十八年祝融の災に罹り堂宇過半烏有に屬し全山維持の

として赤土山に創立せしを始とす(然るに一説あり曰く永承六年源義家武衛兄弟を滅ぼせしとき八幡大神の擁護を蒙りしかば其報恩として康平六年茲に創立す云々)降て建久の初年に至り足利義兼公の尊信する所となり大に修繕を加へしかば里人深く喜ひて同六年三月十三日義稱命と尊稱して當社に合祀す之れ義兼公其名を義稱と改めしに由るなり其後豊臣徳川の二家より朱印地若干の寄附ありしも明治維新の際土地せり

因みに記す現神職長祐多氏は遠祖長六郎兵衛以來血統連綿として四十代を経る舊家ありと

●無量寺 同字にあり福聚山無量寺と號す當寺は元和元年長四郎信勝の開基にして開山は雲樵祖養和尚なり師は毛野村大字山川長林寺八世の住職にして夙に博學の開へありき三世密傳察師に至りて堂宇を修繕し境内を淨めて信徒日に加はれり之を當山中興の開山とす後文化六年九月同祿の災に罹り堂宇盡く烏有に歸し翌年直ちに庫裡を再建し同九年本堂を再建し以て今日に至れり

●持寶院 大字利保にあり山號を醫王山と號す其方法なきを以て頗る荒廢に歸せしか現今有志の淨財を醱集し修繕の計畫中なりと云ふ

●樺崎八幡宮 大字樺崎にあり往昔足利上總之介義兼の創立する所にして義兼佛教に歸依し晩年遁世して諸國を巡錫せし後正治元年己未三月八日此地に病没せりと云ふ明治維新前は徳川幕府より圭田二十石の寄附ありき明治三十五年縣社に列す

◎三重村

●區劃 五十部 今福 大岩

●最勝寺 大字大岩にあり大岩山最勝寺と號す眞言宗に屬す傳へ言ふ當寺に安置せる毘沙門天王は丈一

寸八分の間浮担金にして聖徳太子の作に係り日本三休(信貴、大岩、鞍馬)の其一なりと抑此尊像は聖武天皇の御宇行基菩薩大和國菅原寺に在りし時尊信せる靈像にして菩薩心に誓て曰く吾れ東國に下りて靈地を開き以て安置し奉らんと其誠心佛陀も感應ありしにや或夜夢中に一人の老翁來り告て言ふ汝の所願年既に久し我汝に靈地を指示べし礪氷峠の東利根川北に下野國あり

足利

之れ實に汝の往て將に開くべきの所なりと行基奇異の思ひをなし心願果して成就せは必ず一の祠を創立して此異人を祀り以て一山の鎮守となすべしと誓ひ直ちに當國に下り足利の里に止りて一字を創立し朝夕信心忘なかりしに(今の足利町にある行基山徳性院之れなり)或夜夢中に甲冑の神人來り告て曰く是より北方に靈山あり大岩山と云ふ地清淨にして實に道場となすに足る急ぎ赴くへし吾は是れ多聞天王なりと言ひ了りて去る上人益奇異の思ひをなし即ち大岩山に登りしに果して絶壁千仞岩石羅列し満山金光を放ち燦爛として恰も仙界の如し上人大に喜び直ちに草庵を結ひて自ら丈六の多聞天王の像を刻して茲に安置し天平十七年上京して大岩開山の顛末を詳かに奏聞せしに敏感淺からず直ちに大僧に進め給ひ大岩山を多聞院最勝寺と號する事を允可あり其翌年勅して本堂經堂釋迦堂三重塔山門鐘樓及び十二坊を建立せしめ神寺領若干を賜はれり後數百載を経て觀應文和の頃に至り將軍足利尊氏の歸依を得堂塔の修繕ありしも文安四年五月二日雷火の爲めに堂宇什寶盡く烏有に歸せり其際幸ひに前立尊行基上

人作)脇立登(連慶ノ作)山門仁王尊(全上)等は本尊と共に全りとを得たり其後寶曆十二年定慶上人衆の歸依を得て堂宇を再建し爾來法統連綿として今日に傳はれり寺傳に見ゆ

●水使神社 水速能女命を祀る大字五十部にあり當社は往古の鎮座にして勸請の年代詳かならず傳へ云ふ弘安年中茲地の豪族餘戸小太郎の使女某或日主家の嬰兒を擁して祠畔に遊び附近を逍遙する中忽ち嬰兒を失ひたり仕女大に驚き其所在を搜索せしか兒は猛鷲に攫み去られて池邊の松枝に喰ひ殺されつゝあり其影水底に映れるを望み實體と思ひて自ら身を池中に投して死したり爾後此池邊に於て屢異變ありしかは世人之を使女の祟りと稱し村民議りて其靈を御厨子神と尊稱して當社の相殿に奉祀せしか明治維新の際水使神社と改稱せり今尙世人池を影取の池と唱へ松を影取の松と名くと口碑に傳へり

◎山前村
區劃 山下 大前

●小此木正信宅址 大字大前の北方堀の内にありて石壁今猶存り小此木氏は小俣城主澁川氏の老臣にして備中と通稱せりと云ふ

●長尾景孝の墓 大字大前の西方字西臺にあり景孝は坂東平氏鎌倉權大夫景通の後裔にして其子孫今猶同村に連綿たりと云ふ

●青木春方 幼名彦三郎後ち清五郎と稱す大字大前の人なり文政八年を以て生る性深沈にして學を好み藤森弘庵に業を受く領主土井萬太郎其材を愛し擧げて代官とす茲に於て春方意を民事に注ぎ夙に令聞ありしが後ち病を以て致仕す時に米艦浦賀に來りて四海鼎沸志士東西に馳せて尊攘の大義を唱ふる類もなり春方奮然として曰く今や國家多事に際し坐視するの時に非ずと乃ち姓名を變じて西岡邦之助と稱し上州の新田萬次郎を擁して尊攘の兵を擧げんとせしも事遂に成らず元和元年甲子水藩の士勤王の兵を常野の間に起すに及び其軍に投して筑波山に據り部將となる時に軍中硬軟二派ありて空論に日を消す春方其因循を怒り同志と共に將に房總に向はんとす之より先幕府追討の命を下し

諸藩兵來り攻む春方等之を鹿島附近に逆擊し府中土浦に轉戦せしか遂に敗れて同志離散し事を爲すべからず然れども春方更に屈せず殘兵を糾合し再舉を謀らんとし土浦に潛匿中途に古河藩兵の爲す捕はれて獄に下り幾何もなく其城下に斬らる在獄の日指を噛みて血得し親戚に贈れる遺書あり之を見れば今も猶血痕淋漓慷慨の氣悚然たらしむ即ち明治の聖代に至り朝命を以て靖國神社に合祀せられ偉名永く竹島に傳はれり

●力士有土山 須藤三郎兵衛と稱す大字山下に生る軀幹巨大にして幼より角力を好む頗る臂力あり寶永年間二十歳にして江戸に出で、力士となる會て徳川吉宗上覽角力の時勇を鼓して東西の力士を倒す吉宗其怪力を賞し名を山下八八と賜ふ之れ六十四州に敵なしとの意なりと云ふ後京都に上り桃園天皇の勅覽を忝ふし金若干錦の御守袋水晶の玉等を賜はりて日の下開山有土山と命名し玉ふ有土山天恩の優渥なるに感泣し晩年業を廢するに及びても天皇の萬歳を祈りしと六十六にして死す其子孫今猶當村に在りて御下賜品を大切に保存し居れりと云ふ

● 遍照寺

大字大前にあり自性院遍照寺と號す眞言宗に属す常寺創立由来を釋ぬるに大同年間慈覺大師難足寺の住職たりし時八ヶ寺の末寺を建立す當寺は即ち其一なり天慶年間平將門下總國猿島郷に據りて叛するや朝廷難足寺に勅して賊魁調伏の秘法を修せしむ茲に於て八ヶ寺の末寺相聚より晝夜祈禱を凝らし遂に其効を奏せり當時常山の住職は圓淨僧都にして高德の聞へ高く歸依頗る多し之を當寺の開山とす後ち故ありて現今の所に轉し數度の災害に遭遇して寺運甚だ振はさりしが文久二年再建し以て今日に至れり

● 郷社大原神社

大字大前にあり天照大神天兒屋根命、經津主命、武甕槌命の四柱を合祀す當社は景行天皇の皇子日本武尊東夷を征討して信濃國に向はせ給ふ時字台山に勸請せる由緒正しき古社なりしも爾來貞享年間に至る六百年間の事蹟は古記録湮滅して知る能はず降りて貞享二年九月に至り社殿大に荒廢せしを以て直ちに之を再建し天保の初年更に本殿の上屋を新築す抑當社は往昔より近郷中著名なる大社にして小俣、葉鹿、山前、三重、三和、菱等の各村は皆其氏子にして三千餘戸に及び例年の祭典は特に盛觀を極め信徒の歸依厚く明治五年十一月社格大に昇進して郷社に列す

◎ 三和村

● 區劃 松田 板倉 粟谷

● 松田館址 大字松田に在り往昔松田刑部小輔邦隆の住所なりしか文明年間に至り堀江刑部光高なる者代りて住居せりと又一説に阿曾沼廣綱の子佐野七郎四郎基房、荒卷刑部菅原房綱二人の遺跡なりと以上二説は里老の口碑に傳ふ

● 宗泉寺

大字松田にあり端藏山宗泉寺と號す曹洞宗に属す當寺は正和三年の創立にして開山は南叟周岳和尚なり爾來法統連綿として文化七年三月十九日に至り堂宇を再建し境内を擴張せりと

● 正蓮寺

大字粟谷にあり鎮雄山正蓮寺と號す眞言宗に属す當寺は建久年間新田大炊助義重の創立にして開山は鎮如法印なり境内に蓮池あるを以て青蓮院と號す天正十九年徳川家康公より朱印地五十石を附せら

● 無量院

當寺は其創立年代詳かならざれども寺記に據れば天慶年間平將門征討の時僧定海勅命を蒙りて乃ち本郡難足寺に至り賊徒鎮定の祈禱を修む程なく將門誅に伏せしかば定海退り此所に草庵を結ひ鹿倉山無量院と號して専ら衆生を教化せりとあり之れ當寺の權輿なり中興圓商の代に至り大に堂宇を再建し爾來法燈隆盛にして以て今日に至れりと境外に地藏堂あり石井津空の持佛を安置す世人厄除地藏尊と云ふ尊空は小俣の城主澁川相模守の家臣にして著名なる勇士なりしが故ありて佛門に入り之を當寺に納めて朝夕尊信せり初めは境内にありし中興開山圓商の時現今の地に移せりと云ふ

◎ 小俣村

當村は郡の西部にある一小市街にして戸數五百貳拾九戸人口三千五百八十五を有す此地は足利町より十野國桐生町に通ずる所謂桐生街道の要衝にして旅客の往來頻繁なり近年兩毛驛道の停車場を置き以來殊に長足の進歩をなし漸次繁榮に赴けり

◎ 葉鹿村

れし時誤りて寺號を正蓮寺と記入ありしを以て爾來青蓮院を改めて正蓮寺と號したりと爾來屢祝融の災に罹り什寶古記録等を燒失し現今の假堂は明治二十二年に建立せしものなりと云ふ

● 喜福寺

大字松田にあり松田山喜福寺と號す臨濟宗に属す當寺は明暦六年九月の草創にして古河公方前左兵衛督正四位源朝臣足利成氏公常庄松田郷にありし時伽藍を建立して正庵禪師を請し開山となせりと云ふ

● 區劃

● 光泰寺

向陽山光泰寺と號す曹洞宗に属す當寺は慶長元年三月の創立にして勅賜圓明正續禪師の開山なり武藏國榛澤郡人見村入見山昌福寺末に屬す爾來法統連綿として十七世泰宗の時に至り同祿の災に罹りて堂宇盡く烏有に歸す天保九年再建す現今の本堂即ち之れも末寺二ヶ寺を有し開山より現任に至るまで三十三世なりと云ふ

●小俣城址 本村の西南字町屋に在り方形にして
 東西北の三方には濠塹依然として猶存して東北の一隅
 には岩石を重疊せる堆かき所あり之れ物見櫓の跡なり
 と云ふ當城は往昔足利宮内少輔泰氏の六男小俣民部卿
 法印賢實の築く所にて其子律師仲義孫少輔義弘等襲て
 居城せしか天文年間に至り澁川義昌(北條氏の臣)代り
 て城主となり天正十八年其子相模守義勝の時主家北條
 氏の亡ふるや義勝は豊太閤に降り爾來廢城となり

●小俣古戰場 元龜三年夏上杉謙信の部將荻田
 備後守善備中守等來りて小俣城を攻む時に城主澁川相
 模守義勝小田原に參勤して不在なりしかば城兵大に狼
 狽せり守將石井尊空、榊山出羽守等衆を屬まして敵軍
 を笛吹坂、雞足寺山に逆襲して大に之を敗れ關東古
 戰場に據り當時の戦況を録す

野州足利郡小牧(小俣の誤)の城主澁川相模守義勝は
 刑部大輔義季の後裔にて累世當所を領知して岩井山
 の長尾修理亮政長の妹嫁と成て上杉謙信の一味たり
 しが近年山良、長尾、桐生に合体し古河義氏の幕下
 となり今己に氏政の指揮に應せも然るに義勝小田原

へ參勤して滯留の隙を伺ひ善備中守宗次伊勢崎の萩
 田備後守人數を併せて彼城を乗捕んと欲し四月廿日
 境野三堀筋へ出勢二手に分れて下夏山中島所より
 攻寄たり時に小俣の家臣榊山出羽守か曰く宗徒の者
 共は悉く府君に供奉して小田原へ行きぬれば留主の
 微兵を以て防戦せんと叶ふまじし唯一向に城を渡し後
 日府君御旗を擧げられん時手際よく奮撃して會稽の
 耻辱を雪かんに如かすと申ければ多分此議に同じけ
 る所城代石井人道尊空眼を怒らし假令府君は留守に
 して微兵と雖も御先祖式部大輔荒加賀、道義國以來
 數百年持傳へられし城を一戦もせざるべしと敵の
 手に渡さん事口惜しき事哉其上日本無双の強將上杉
 謙信の兵に圍まれ討死せんは弓矢執る身の面目なれ
 共彼小數の爲ふ死せんは思ふ寄すと云ければ衆皆尤
 と一同し在合侍百五六十人防戦の用意をなす笛吹
 坂の切所は榊山出羽守、窪澤豊後實子内匠泉備前別
 府河戸等相固たり石井尊空嫡子安藝、本男丹波、大
 川土佐、山本雅樂、加藤隼人、名渡彌九郎、松本小
 太郎、片岡金五郎、窪田金八郎、神内中六郎等け雞

足寺嶺に登て石弓坎半を架し攻上る敵を微塵になさ
 んと設けたり尊空諸卒を戒告して曰く大將の留主と
 云へ寡を以て衆を引受るなれば史に勝べき軍にあら
 ず各死を善道に守り譽れを萬世に發すべし但し佛神
 三寶の加護をも相頼まば弓矢の冥加と思ふ故なりと
 て雞足寺の俊國和尚をして戦勝を祈らしむ斯て寄手
 中島へ攻入左右の在家を燒拂之を見て榊山出羽ト
 知して山上より鐵砲を飛ばし巖石を投げかけ防戦
 せしかは善備中守宗次攻倦んで戦地を退き萩田備後
 守と一手に成りて黒暗澤より又攻登る此口を石井
 の一黨七十餘人大石巨木を落しかけ火水になれと防
 さ守る寄手の剛兵必死に成りて一足り引かじと説ひ
 進む未の刻に至りて城兵戰疲れ此口己に破れんと
 する所俄に暴風起りて敵の方へ一面に吹きかけ半時
 許りか間暗夜の如く成りて草木の色も見分けざる程
 なりしかは寄手の大將備中宗次を始め五六十人山上
 より落し掛けし磐石に打ひしがれ忽ち命を殞す不思
 議と云もおろかなり萩田も二百余兵討たれて遂に攻
 口を引退さ米澤山に於て敗卒を集め伊勢崎へと退去

しける

●雞足寺

寺傳に曰く當村の長に方りて石尊山
 あり繼體天皇元年四月八日より鳴動すること七日間に
 して忽然石佛一躰湧出す當時佛敎未だ我國に渡來せざ
 るを以て其何佛の像たるを知るものなし數百載経て平
 城天皇の大同三年二月十五日又大に動鳴し同四月八日
 に至りて漸く止む時に慈覺大師(當國下都賀郡小野寺
 村の人)年十五來りて其奇を見る其西麓峨々たる一峰
 あり無數の猿猴葛藤を二峰の絶頂に結ひて橋梁の如く
 し慈覺を誘導す依て東峰に攀れば一躰の石佛儼然とし
 て坐し其前に方七尺餘の大石ありて鳴動更に止まず群
 猿葛藤を以て之を縛し同音に久遠山林鶯峰湧出と喝を
 唱へて北方深谷中に投下す時に虚空に美妙の聲あり石
 佛に敎文淨現す文に曰く石佛世尊、愛感援佛、教手援
 濟、鶯峰湧出と慈覺信心肝に銘し郷に歸り程なく萩田
 にも上りて傳敎大師を師とし具さに石佛湧出の顛末を語
 るも適平城天皇の敎聞に達し乃ち橘左中辨秀勝に勅して
 其虛實を探らしむ秀勝來りて石佛を拜し歸りて見聞の
 事實を奏す大同四年四月八日勅して奈良東大寺の住僧

定惠尚和に命し當寺を創立せしむ茲に於て定惠直ちに下向して一字を建立し石佛を勸請し更に釋迦如來の尊像を刻して本尊とし一乘山世尊寺一乘坊と號し山王を崇めて當山の惣鎮守とす而して寺を三品に分ちて二十四坊を建立せり朝廷法燈の料として小俣、葉鹿、板倉、松田、山下、大岩、五十部、今鉢の八ヶ村を賜はり永く勸願所と定めらる其後仁壽元年慈覺大師當寺に來り住し寺號を更に金剛王院と改め山王神社の社名を八十八社と稱へ石佛の浮文に因みて佛手山と號し釋迦室、速治及八ヶ寺を再建す降て天慶二年十二月十五日に至り平將門下總國旗島郷に據て叛し自ら平親王と稱して百官を置き遠近を掠奪す朝廷兵を起して之と討たしめ且勅を當寺に下して賊魁を調伏せしむ茲に於て住職常師祐其末寺を會して之を祈る適々滿願の日當國の押領使出原藤太秀郷將門を誅して亂中く朝廷大に秀郷を賞し又當寺の祈禱其功を奏したるを嘉し玉ひて乃ち勅狀一通、勅宣一通、木像の五大明王、寺領一通、僧正官永旨等を賜はれり此時寺號を雞足寺と改む之れ將門調伏の時三足の雞鳥來りて祈禱の壇上に足跡を印

し且つ種々の奇瑞ありしを以てなり安和元年霜月廿四日常師師百三十六歳の長壽を保ち當寺の良位に方る山麓の洞穴に入定す今の入定塚即ち之れなり當寺は創立以來天台宗に属せしも建長七年眞言宗に轉す之より先き當國小山庄樂師寺の僧岩快上人高野山に密法の蘊奥を究め歸國の後慈猛上人と號し高橋天下に聞ゆ當山三十三世賴尊深く其教に服し當山を擧げて之に属す爾來雞足寺は同流の惣本寺となり遠近の侯伯皆擅徒となり歸依殊に厚かりしか其後兵燹に罹りて堂宇盡く烏有に歸し寺領等も掠奪せられしか天正丁九年徳川氏に至り朱印地十石を賜はり漸く舊觀に復するを得以て今日に至れり而して現今の本堂は正徳三年の建立に係る云々

●村社熊野神社 當社は大永六年二月の創立にして紀伊國牟婁郡熊野神社より勸請す地は吉田山の半腹にあり境内を妙見山と稱す風景頗る絶佳なり

◎ 菱村

● 區劃 黒川 上菱

●細川内膳城址 大字黒川の中央宇内膳屋にあり東西二町南北一町菱形をなす北方に空深あり古へより丹後堀と稱す應永十九年細川丹後守の築城なりと傳ふるも其事蹟詳かならず或は云ふ細川氏は天文十三年桐生大炊介なる者の爲に滅ぼされたりと蓋し當時廢城せしもの歟

●泉龍院 大字黒川にあり曹洞宗に屬す當寺は不盡和尚と稱する有徳の開山なりと言ひ傳ふるも其事蹟詳かならず口碑に據れば天文二年六月の創立にして不盡和尚自ら釋迦の尊像を刻して安置せりと云ふ後二百九十四年を経て文明年間に至り堂宇頽敗せしを以て十一世禪豐再建せり當寺の境内は頗る廣豁幽邃にして四面山岳屏列し眺矚甚た佳なり西北に行くこと數町にして一池邊に出つ口碑相傳ふ往昔池中に蛟龍あり常に出て人畜を害す里人怖れ敢て近づくものなかりしか或時山崩の爲に俄然埋没して終に其災を免かるゝ事を得たり依り茲に一字を創立し蛟龍に因みて田澤山泉龍院と稱せしなりと其事蹟は逸として信を措くに由なし

◎ 梁田村

● 區劃 梁田 下澁垂 福富

◎ 久野村

● 區劃 久保田 野田 瑞穂野

● 滿福寺 大字瑞穂野にあり地藏院と號す眞言宗に屬す當寺延慶二年八月十五日の創立にして法印玄海之を開山し源空上人の作に係る勝軍地藏の尊像を安置すと中興開山春首の代宗風大に振ひしと云ん

◎ 筑波村

● 區劃 小曾根 羽刈 高松 高富字縣

◎ 御厨村

● 區劃 福居 高富字百瀬 島田 上澁垂

● 福居驛 舊梁田郡の驛邑にして現今は本村の一部に屬す元日光例幣使街道の一驛次なりしを以て其昔し徳川の流れ滞き頃は驛路の鈴の音斷え間なく繁昌の

地なりしも明治の聖代に至りて鐵路の開道以來頗に衰退して復た昔日の面影なく僅かに古老の夢物語に往昔の名残を留むるのみ地に警察分署郵便局等の設置あり

●勝光寺 大字上遊垂にあり法道山關伽井坊法定院勝光寺と號す當寺は屢火災に罹りて古記録の徵すへさなく其創立年代由來等を知る能はず現今の堂宇は明治二十五年の再建なり

●覺性院 大字島田にあり稻荷山極樂坊阿彌陀寺覺性院と號す眞言宗に屬す當寺の創立年代及由來等は古記録の徵すへさ者なきを以て之を知る事能はず只現今の堂宇は明治三十五年の再建に係るものなりと

●覺本寺 大字島田にあり明嚴山善明院覺本寺と號す眞言宗に屬す當寺は初め足利郷五十部村に創立しありしか火災に罹り廢頽に屬せしを文永九年慈猛上人の高弟覺本上人深く之を憂ひ現今の地を卜して一字を創立し自ら開山とし永世不退轉の道場となす後屢火災に罹り寺運再び衰頽に赴きしか文化十四年當山三十六世眞應齋て堂宇を再建す現今の堂宇即ち是なり爾來法統連續として今日に至り開山覺本師より現住に至る實

に四十世を経たりと云ふ

◎山邊村

●區劃 堀込 八幡 借宿 田中 朝倉

●八幡宮 大字八幡にあり式部太輔源義國の創立にして其孫足利兼重孫尊氏等屢社殿を再建し世々足利氏の守護神として崇祀殊に深かりき斯る名社なりしを以て徳川幕府より圭田二十石の寄附ありしか明治維新後上地奉還せり

栃木通鑑前編栃木縣誌終

拾遺

地なりしも明治の聖代に至りて鐵路の開道以來頗に衰退して復た昔日の面影なく僅かに古老の夢物語に往昔の名残を留むるのみ地に警察分署郵便局等の設置あり

●勝光寺 大字上遊垂にあり法道山開伽井坊法定院勝光寺と號す當寺は屢火災に罹りて古記録の徵すへさなく其創立年代由來等を知る能はず現今の堂宇は明治二十五年の再建なり

●覺性院 大字島田にあり稻荷山極樂坊阿彌陀寺覺性院と號す眞言宗に屬す當寺の創立年代及由來等は古記録の徵すへさ者なきを以て之を知る事能はず只現今の堂宇は明治三十五年の再建に係るものなり

●覺本寺 大字島田にあり明嚴山善明院覺本寺と號す眞言宗に屬す當寺は初め足利郷五十部村に創立しありしか火災に罹り廢頽に屬せしを文永九年慈猛上人の高弟覺本上人深く之を憂ひ現今の地を下して一字を創立し自ら開山とし永世不退轉の道場となす後屢火災に罹り寺運再び衰頽に赴きしか文化十四年當山三十六世眞應齋て堂宇を再建す現今の堂宇即ち是なり爾來法統連續として今日に至り開山覺本師より現住に至る實

に四十世を経たりと云ふ

◎山邊村

●區劃 堀込 八幡 借宿 田中

朝倉

●八幡宮 大字八幡にあり式部太輔源義國の創立にして其孫足利義兼或孫尊氏等屢社殿を再建し世々足利氏の守護神として崇め殊に深かりき斯る名社なりしを以て徳川幕府より圭田二十石の寄附ありしか明治維新後上地奉還せり

栃木通鑑前編栃木縣誌終

拾遺

日光の裏山

著者曰く本編上都賀郡の部日光山の記事山水の幽趣建築の精緻技術の巧妙等多くは考證の記事に亘り無味淡々凡筆の能く讀者に満足を與ふる能はざりしを憾みとせしに長谷川天溪君が日光裏山てふ記事は友人田山花袋、齋藤紫白、菅原英信君と共に日光を踏破し特技の麗筆を揮つて叙せられしものにして一讀三驚身は日光の裏山を踏破するの感あらしむることを多とし爰に是を抄録し讀者諸君をして自ら仙境に遊ぶの憶あらしめんとす

日光の裏山と言ふは勝道上人登山以來壘所として毎年日光一山の僧が山禪定と稱して跋涉した深山であつたが維新後は其事絶えて今では餘程の物好き許りが這入り込むのである吾等も山といふ山は見よふといふ志願から今回は日光の裏山の探見といふ機會を作つた十月十日寫眞師の紫白子と僕とは先發隊として日光に若き霧降灘に遊ぶやら登山の仕度するやら寫眞をとるやら煩しく半日を送つた後發の花袋子は夜の十時頃に着い

て茲で相談を測へて夢の世界に旅行したのが十二時頃でもあつたらう

三人共照尊院の御世話になつたのである大谷川の水音は眠れる山に響ひて浮世の塵を追い拂ふやうに覺れた明くれば十一日昨日の空に蟠つて居た怪しい雲は跡方もなく消ぬ去つて澄み渡つた青い高い空は吾等の勇氣を更に鼓舞した、さて出發となつて人足兩人に擔がせた品々を敷ふれば四升の豆餅、砂糖、梅干、松魚節といふ日本古流の食品の中に西洋流のモルトンブランデーは贅澤過ぎるといふので正宗を買ひ英信師は御茶も入用といふので其用意を測へた人足は腰に大銀と大銀とを挿し一行は毛布を肩に懸けて五時頃出發した英信師は冠物から脚絆まで出家の姿花袋子は和服の扮装で紫白子と余とは洋服姿といふ妙な配合が出来たさて此一行は何と見ゆるであらうか御出家様と田舎の哥兒(花袋子)と土方の親方(紫白子)と今一人は自分といふ少な妙な男との道連れで實に奇觀中の奇觀である

禁断石

號令もなければ合圖もなくのろ／＼と歩き出して三代將軍の廟と日光神社との間の長い礎を登り盡すと茲は山禪定の入口で今迄は蒼鬱たる杉の並木を通ふたが此所からは灌木の間を通りぬけて廣い所を二十丁斗り登ると禁断石に着いた禁断石は高さ一丈五尺餘幅四尺許の碑で古は此碑より先きの方に殺生を許して里人に生活を立てしめたのである碑の文字は雨露に喰はれて讀み難くいかにも殺生禁断といふ語の嚴しく響き渡つた昔の光景を思ひ浮べることが出来た

禁断石から笹ばかりで目を遮る程の大樹や森林やは更に無い面前には女の仰向きたる横面に髪髻たる女貌山を眺め右には稻荷川の溪を隔て、赤蘆山の顛を望むさて是より眞のか山なり行けや／＼と笹を掻き分けて登ればろ／＼息氣苦しく折々立止つては豁如たる風景を望めた登るに従て笹深く道細く山の氣も一際身に感せられて善い人間にゐるよりの氣がしたさて二十町も来たかと思ふ處に古色蒼然たる墓らしいものが一基あ

る熟視すればこれは愛らしい稚子の姿を刻んだもの楮ては名高き兒ヶ墓は是にやと問へば人足は背き英信師はこれは抑延文年間に實道坊といへるが冬の禪定に入りし時其の兒法師を慕ふて此處まで来たが嶮に觸れて果敢なくなつたので一山の僧之を憐んで遠見に是を建てたのであると教へた吾等が踏み來つたあの急坂を此愛らしき稚兒がたゞ一筋に師を慕ふて踏み登つて死んだのかと思へば何となく哀れに感して墓に向つて慰の言葉をもとまで思はれた道は次第に急となつて咽喉は漸く乾きを感じたが水乏しき山と謂ては水筒を傾くるが惜しさに笹に溜つた露を嘗め出した巍然たる女貌山峻嶮なる赤蘆山脈を環らして黄色の勝つた緑の山腹で爾も日障りのない廣い處で玉も見ゆる露を味へはげに天の降らした甘露とは此の事ではあるまいかと思はれた、かくて登ること十數丁廣い長い斜傾は且渡す限り新り揃へた様に小笹が生へ茂り其先に環狀をなす山々は躊躇然として紫色を放ち天晴れ渡つて寸塵もあらずに生へたる樹木は庭師が植へ附けたかと思はれる程の地に位地宜しく洵に油繪にも表し難いと思はれる程の地

に到つた、此の蒼天の下に此の悠々たる高潔の風景を
見れば大々の休息せざるを得なかつた、腰を据れば
胸から下は僅に隠れ残りの露はら／＼と落ちて毛布に
無数の美しい白い玉が出来た、さても面白や先づ腹の
用心しながら飽きるまで酒然たる風景を貪らうとたつ
た一盃づゝの尊き酒に餅を肴として來し方を眺むれば
大谷川は薄墨の間に銀色を放つて末は雲に隠れ日光今
市の人家も箱庭の道具と見えた

八風より七瀧に至る

さて行きませうと此景に訣を告げ遠く見ゆる高い山の
端に向つた、その麓に至れば道は立てかけたやうに遠
に急となり僅かに三四町の間に意外の時間と勢力とを
費して漸く頂點に達した、八風の名ある所今迄の
道より一段高く左には靈峰男峰山肅然として雲霄に聳
ぬ右には赤蓮女貌の其の昔ヲツアを流した跡か幾重の
巖とあり合して整然たる青緑の斜坡を造つて灌木漸く
多く葉は色つきて早きはら／＼と吹く秋風にすら無
常を示して居る、是より此岡の背を傳つて登り盡し左

ふこと紫白子は既に頼り出した、其勞れた足で此の峻
しい山を行くは困難ではあるまいかと思はれたが今更
如何ともし難い、まつ緩々で行くべしと坂路に就けば
聞きしにまして急である恰も地面と直角せる線を攀ち
躡ると等しく人の足と我が頭は一直線をなし根のしま
りなき草も細い枝も崩れさうた岩角も一として手寄な
らざるはない斯ふなつてはもはや歩くのではなくて登
る道ひ登るので箱石金剛に着いた頃は獨りに疲れた腰
か地に下りた、考ふれば適宜の處に禮拜物が安置され
たものである自然石を以て四方を圍んだ中に深秘の寶
物があるといふふとだがふんふんとを研究する心はな
く孰もせい／＼言つて居つた
此邊より大木林を成して日の光も通らぬ程である雪に
折れた枝雷に裂れた樹は道とも見ぬぬ路に横つて居て
更に一層の困難を感じた、英信子と花袋子とは一足お
先にといふ事て木々の間に隠れたか僕は紫白子のつら
さうな蒼い顔色に心を痛めてもし萬一の事か有つては
と徐々として人足を従へ都合四人で登つて行つた行け
とも／＼林の中はかりていかにも物淋しい其道に當つ

方の降り道を廻れば滿山是れ紅葉まだ色失せぬ落葉を
踏むはもつたい無くも心地よくバラ／＼と地を撲つ紅
葉を見つゝ紅の林間を見つれば山と山との間一方は深
大なる溪谷に臨む地に達した
此處は七瀧を見る地である底も見ぬす廣さも測られさ
る淵大なる大溪谷は即ち稻荷川の上流て之を隔て赤蓮
と女貌との脈接續する所赤蓮山の崩れ落し面は赤色を
帯ひて直立し其頂には纒かに山の端に留りし樹木か行
列を揃へて居る、其崩壊面其巒峰の接續する所に全山
の水を搾る十數の瀑布か懸つてある、遠く隔り居れば
水音け耳に響かぬが水なる銀蛇の天に登るか如く大な
るは水煙を立て其處に五色の雲か現れて居る、近く溪
に突出せる女貌の連脈は紅葉もて飾られ松の緑りも意
張るへき餘地なしと見受けられた

唐澤

「是からが難所だよ」案内者の言ふに今更驚きて見上れ
はかなたに女貌の頂上を眺めたがかしこ迄は日前の山
を踏み越えて迂廻すること二里餘をあらはに到らすとい

て露に晒された白骨かあつたふれは鹿の骨と見たか恐
らく其肉は猛獣の餌食と成つたのであらふ
漸くのこと唐澤の宿に着いたこれは女貌山の南の山
腹にあつて行者の休息所が一軒ある勿論休息所の主
人あるてもなく各勝手に水を汲み茶を呑み今迄の疲勞
を療すので其の水すら時に依ては湧んで居ぬといふ
諸君等は後世の善い者と見えて水は十分に出て居つた
これて茶を沸かし餅を喰つて漸く半日の疲勞を慰め得
た

女貌山

唐澤から半里餘の間はまた急峻の坂路で路傍の草木は
何れも矮小で寒氣の強きを現して居る愈々頂上近くな
ると有名な延松があるこれは姫小松と稱する五葉のも
の八町餘方に蔓延はつて何處に根があるか分らぬとい
ふ奇木である成程岩石の上に蔓うて四方に延び或狭く
或は廣く霜を凌いで緑の色を變へぬ所操の高きを現し
て女貌山には至極適宜した植物である、山頂の神社は
蔓延松の間にあつて二間四方に足らぬ祠である其の後

に一段高く寸の草もなき方寸の尖突の地が即ち山嶺である、見渡す限り山岳彼れは何山是れは何山と數ふれば只迷ふばかり亂脈の中に秩序あり一行は只莊嚴の威に撲たれて形容の詞も出なかつた

此の錐の尖の如き頂點から降る道が劔峯である劔の刃渡りとも謂ふべく兩側は深い谷に續ける急傾斜の狭路を踏ひたる鎖に縋つて下るので常に口を出したまどのないお念佛が自然と出て來て英信師に氣焰を吐かれた三町弱て此の險路も盡き稍平坦とされる地に至つて蕪きたる所より南方を瞻望すれば山は開けて居れど白雲湧き出て、下界を閉じた大斜傾を横つて石楠木其他の雜木を掻き分けて行くと直立せる大岩怪石か道を塞いてある

専女山

は即ち是て鎖に縋りつゝ、二丈許り登れば頂上である此處には奇石怪岩散在して鬼の世界かと疑はれた顧みれば女親山は巖然として不滅を默示して居る西には小真名子太郎大真名子男跡の諸峰無限に連なる

白雲を破つて黒緑の色を示し悠然天上に迫る所に縋縋として神靈の氣乾坤に滿ち充てるを感した一種言ふへからざる冷氣(の)は吾か骨までも染み徹つた思へば尊き無形の神は吾等を俗界遠く導いたのてあつたらう

専女山からは再び藪を分けて十丁許りて

帝釋山

の下に着いた、はてはて疲れた此の足て亦もや壁の如き急坂を登るかと思へは何となう情なく仕方なしに木の根岩角を力にして登り行けば意外にも頂點は近かつたよれて今日の登りは終りと聞いて紫白子は萬歳の聲を放つたか實は僕も竊かに胸を撫て下したのである矮樹の間を通つて燒石の散布せる處に出つればの奥の院がある尺餘に足らぬ石の祠か即ち是れて茲からは會津越後の諸峰を一日に見渡し脚下に栗山郷を瞰下するとか出來た五分にも足らぬ此の曠に數十里の風景か自在に飛び込むといふは亦と得難い愉快ではあるまいか

いよ／＼下り道となつた下るに従つて樹木は大きく高く枝葉茂つて地は乾く間もないらしい、斜傾は甚だ急て短い杖では跡の位置も定らぬ程財も重い足は根や岩に躓いて幾回か尻をついて危くも木の根に助けられ遂には下りほど厭のものはないとの嘆聲を發するに至つた、樵の小さい針の様な枯葉は觸れる毎に雪の如く降つて頭の間から背中にむくりまむ其のいやさ加減は登り道にお世話になつた恩も忘れる程であつた此の危險にして薄暗い道を一里半下つて半丁四方ばかり平な地に着いたよ、は馬立といふ所で日光と栗山郷との通路ではつたて小屋の中には味噌や米や漬物や石油や種々の物が在つた此の澤山に此の品々あらうとは餘りの不思議さに其由來を問へば栗山郷は今日尙物品交換の太古の風を守つて居るので此れ等は大方日光の町から持つて來たのでいつれ栗山の人か山の物と取り換へるのであらうとの話、それにしても番人が居ぬてはないかと慄みかくれば番人の入用といふか今の考何んの此の質朴無垢の習慣に文明らしい番人とはと嗤はれた

偕て考へて見れば此の旅行には鹽を忘れて來た思ひ出せば出す程鹽氣か欲しいらうよて僕は悪い事而も此の太古の善良なる遺風を亂すは罪深い事とは知りながら茄子の鹽漬を四ツ五ツ摘み出して息氣もつかずに喰ひ込んだ是を見た花袋子も紫白子も堪らすといふ顔て僕の眞似をしたか鹽氣て血の氣か出ると共に良心の呵責は嚴しく英信師の戒も鋭かつたから錢の呪をした、最早や夕刻となつて是より先きには行けぬ去りてて茲で一夜を明すは心細い少し下には柳家位かあらうといふ人足の想像を當にして十丁許り下つた所か果して二軒の樵夫小家かあつたよれが

若澤の杣家

て樵夫はもはや山を下つた後である、各一間半四方の小屋で木の皮を壁や屋根にして風雨を凌ぐ用としてある日の山の端に入らぬ中に夜の用意せよといふので水を汲みに澤に下るやら薪を造るやらそれ相應の煩忙を極めて居る中に人の顔も解らぬほどとなつた薪に値段なし焚けや／＼と投げ入れ酒を不死の靈水と

味ひ餅を長生の妙薬と頌張り其日の壯快なる風景を物語つて居る中に火焰は上なる丸木の棚をペロリと嘗め出したかと思ふ間に棚は凌しい勢で火となつた一夜にても風露を凌ぎし小屋を焼くは無情なりと消せと折角勞して汲み來つた水の半はを打ち掛けて漸く鎮火させてくれからは薪を減し各毛布を冠つて横に成つた間もなく寂寞たる夜陰を破る物悲しい響が一聲二聲、隣に休める人足はわれろ鹿の聲鹿の聲と教へた

此處は山と山との間た、狭い天を見る斗り其の空には星かまはれる程出て風も吹かなかつた、眠りに就けはいつしか夢路に入つて前後を知らなかつたか一時間も経ぬ間に寒氣身を襲ふて夢も醒めた勿論地の上にたつた一枚の木の皮を敷き其の上一枚の毛布を荷物に枕に眠つたので火は何時しか消れて螢火よりも小さかつた驚いて再び火を燃やし燧を取つた後寒暖計を見れば攝氏の一度まで下つて居た、また汲み置いた水には氷が張つて居た、此の寒さには火なくては堪へ難しといふので十一時頃からは交代で火の番を勤めて漸く冷かな

る夢を結び得た

朝の食事を終つて山の間を遠望すれば黒雲頻りに湧き出て次第々々に天に上りやがて帝釋の山腹は頼しからぬ雲に隠れてしまつた

小眞名子山

先づ馬立まで昨日の道を取つて其れから木の間を綴つていよ／＼小眞名子山に攀躋し始めた此の上りは半里餘ではあるが頗る急で案外に手間取つた、然しながら女親山に比較すれば稍や樂で紫白子も去程に困難を感せぬやうに見受けられた

頂上には地藏菩薩の石堂がある此處には樹茂つて林を成し其間から諸方を眺むるのであるが此の時は雲重つて遠く見るまどが出来なかつた此山の降道は帝釋の下りはど長くないが危険の事は毫しも劣らないしかし尙ほ朝の事で足も確であつたから別段の困難も感せず籠の鷹巢に着いたよ、は人の通行する所ではなく只山禪定の時の休息所であるから小屋すらも造つて無い山の狭い間に高い樹が茂つて居るから甚だ陰氣であつ

て只上を向き狭い秋の空を見て氣を晴らすばかりであるよ、で十分に勢力を養つて

大眞名子山

に登り初めた此の登りは一里半といふので里數では閉口する程だが道は意外に登り易く殆んど女親山の半分程の困難も覺わなかつたとは言ふもの、絶頂に着た時には各が携へた水合計一升ばかりは一滴もなくなつた事を見れば随分骨の折れたものである

頂上には御嶽神社が有つて其後の岩の上に五尺許りの日野補現(神人東帯の像)の銅像がある樹は總て短く怪岩あちよちに在つて神鑿の妙も見るべく眼を遠く放つてば太郎山は平行して屹ち小眞名子帝釋は雲の間に現れ其他連山起伏して空に連つて居る前方を見れば昨日まで一様な色にのみ見へた男勝山は最早整然たる圓錐形でなく所々に蘆きたる所や裂けた所や凹んだ所や引込んだ所や木の茂る所や禿げて赤い所やはあり／＼と見わた抑其裾には戰場ヶ原原の一端には赤沼といふ小

山其山と男勝との間には深青の中禪寺湖がちらりと見える戰場ヶ原を隔てては前白根奥白根の連山此の變化ある壯大の風景も忽ち雲に隠れて見えなくなつた寫眞も十分に取つたり雲深き中にも此景を見た今は満足して下り道に指し懸つたが數十間にして

千鳥返しの嶮

に達した是は山脚崩れて土塊は谷間に落ち縁かに巨岩を積み残したばかりの處で鐵鎖に縋りて下るのである側は底知れぬ谷て身を置く場所は二尺の幅に過ぎない而も鎖で足らぬ所には鐵の梯梯か据ゑてある其數は五ツ斗りもある名にしあふ日光裏山三險の一で千鳥も引き返すといふ危き處手足自ら慄うて唯生命惜さに荷物も毛布も捨てたくあつた幸に踏み外しませず三町許の此險路を過ぎ夫より木立の間を下つた十數町の間は岩道の崎嶇たる急坂に用心に用心しても足を滑らし山道になれた人足すら折々尻餅をついた扱て岩も退々に少なくなつた所に溪に臨んで突出した大岩がある是は三笠山の名の有る所て岩には三笠山神の銅像がある

に絶頂て見た銅像も此銅像も共に殺風景の鑄造物ていやな感を感じたか是も畢竟信仰の結果と思はれは美しくも見ゆたのに何ぞや此銅像の母には嫉妬のつもりで三筋の傷が入れてある何者の悪戯かは知れぬか斯様な處で斯様な悪戯を働くは随分馬鹿な人間もある者である

三笠山から下道は生へ茂つた白樺の木立の間で紅の落葉は踵を没する程積つた急斜なる上にまだ腐らぬ此落葉があるので足の止りか甚だ悪くおまけに土が濕つて居て杖さとは何の役にも立たず手も尻も泥だらけになつて滑り落ちるはづみに岩石がかけ落ちて落した當人よりは先の者が凄しい音に膽を冷すといふ有様であつた斯様に滑稽の苦しい下りを一里餘もつとめて漸く麓の八戒山神の碑ある所に達した是から男鉢山と大真名子との谷間で一面に密生して居る隈笹をがさ／＼掻き分けて五六町で

志津の宿所

に着いて行者堂に這入つたのが十一時過ぎた頃であつ

た思へば今迄の山中で下道の最も険しいは大真名子である其處で志津は裏見の瀧から湯本温泉に出る間道で男鉢山の裾に在る四方に高山聳ゆる居る狭い地であるか往昔禪定をする人々は皆此處に一泊したのである中々大きな物で今では八間に五間位の家が二軒あつて其側に清水は湧いて居て長く家を見ず只山斗りを歩行いて来た者の心を慰むるに足る無論空家ではあるが大鍋其他煮焚の道具は備へ付てあつて行者は勝手に是を用ゆるのだ何より熱しい火を第一に作つて夫れから例の餅形ばかりの糰飯をすました時に空は曇つて何處が大真名子男鉢やら方角もどれぬ程となつたが目的の男鉢山而も裏山中の最高峯たる此靈山に登らなければ幅か利かぬといふので十二時少し過ぎから又登り出した紫白子は斯う曇つては寫眞は取れぬから登山せぬといふ事て英信師と花袋子と僕とは曾て登つた事はあるが裏道といふは始てあるから是非探検しやうと言ふので毛布と水筒の外は宿坊に残して登り出した

男鉢山の裏道

男鉢山登山といふ碑の所から幽冥界にても有りうふな陰氣な物凄むちよろ／＼水の流れて居る谷を二つばかり渡つて愈々男鉢山にさし掛つたまだ一時にもならぬ夕暮の景で洵に心細い十町餘り登れば夜明といふ所がある其處に着た頃は霧か細雨か木立を濡れて降りかゝり木々の間から間を見れば黒雲の往來はすさまじい是は必ず降る歸らふか登らふか此山の登りは二里といふほどで見れば雨の難に遭ふは知れた事扱て何と化したものてあらふかと三人額を集めて相談した所歸りたくも

ひ雲か濃々として霧がつて居る吁無間地獄の縁は斯様であらふと膽を冷しなから五町計りの窪を通つて再び大本の間を登つて行つた

あり登りたくもあり中々決しなかつたが遂に勇猛心を起して絶頂に向ふ事に決定した英信師は言ふた「臭生物を持つて居るとれ山が荒れる」所て花袋子は大真名子て松魚節を喰ひ盡し僕のポケットには喰ひ残しか現存して居るのたして見ると雨は松魚節の割てあらふと諦めてばつ／＼登つた登るに従つて道は急雨は激しく枝葉を撲つて大きな滴かばたり／＼と落ちて来る一枚の毛布を引冠つて喘き／＼一里餘て窪に達した爰處は山の崩れ落ちた所て赤く焼け爛れた様な一大斜傾此の端は麓の谷に續くといふ話であるか五六町の下には薄黒

頂上近くなれば樹は皆低く雨は横から降りつけて毛布からは滴が垂れる谷に突出して今や飛出しろふな阿彌陀ヶ岩は雲霧の中に朦朧して怪物かど怪まれる位姿の河原に着いた頃は二三間先すら見ぬ程霧か立籠めて轉た無情を感じた是からは焼石の道て木といふ木は何れも二三尺頂上に着た頃は雨は盛に降つて四方は雲斗り漠々茫々西も東も分らず空も下界も區別なく只々脚下の地盤が見ゆる計り頂上にあるのか大洋に浮ひ出たのか但しは雲の上に舞ひ昇つたのか少しも分らぬ霧中の對面石は大悪魔の顔起せるか如く祠は鬼婆の住む家の如く見受けられた

霧の中を侵して下たが別段の怪我もなく四時といふに志津に着いた

紫白子は火を盛に焚いて待つて居た今日は家が大きくて火事の出る恐れはないから燃せよと言ふので物凄いはと薪を入れて濡れた毛布や衣服を乾かしながら残りの三合の酒を六人で飲んだ、殊更に生姜を選んで肴にしたのは無言の間に少量の酒で多く酔はふといふ心かあつたのだ、借二日間米を食はないので堪らぬうまて入足の持て来た米と吾等の餅とを交換して清水で焚いて喰つたか其の味の美なる實に形容の詞かない程であつた先づ腹も出来たから各毛布を冠つて眠た今日は比較的安眠が出来たか雨か漏つて折々顔を濡たれて夢を覺したのは滑稽であつた

梵字河原

未明に飛び起きて外を見るとまた降つて居た今日は太郎山の險を探る計畫であつたか此の山は裏山中第一の險山であれば此の大雨では如何に向見すの者でも登り切れぬといふ案内者の忠告を容れて残念なからまつた

ぐに湯本温泉に下るよとに決定した

仕度が面白い毛布着て油紙を冠つて纏て色々結び付けた姿は何に譬へて見ようか花袋子と僕は西洋の乞食宜しくて英信師は貧乏の隠居様花袋子は其日暮しの旅商人といふ格で細い流れをじやふ／＼歩いて太田輪の小屋に出て其れから崎嶇たる道を過ぎて河原に出た此河原は太郎山の麓に續いて居るもので男跡と太郎どの水は悉く此處に集まる太郎山の登口の附近には老婆關といふかあるまれば俗に乳母様といはれる石像で太古太郎山の産れた時に産婆と乳母との役を勤めたお婆様たさうた、されは今でも子煩悩のものは臉を犯してか詣するさうた

大小の岩石もて埋れる河原の右は太郎山の裾左は崩起せる芳躰山兩山の間に閉ざれて濛々として居るひどり此旅路を慰めるものは雨を帯ひて光を放つ紅葉であつた、湯澤、御澤は兩岸に削つた岩の屹つた所上の方には桂、葛、猿麻袴か天災地變にも亡ひぬ大木に搦んで風雨に玩はれて居る、河原には邪見の石はかり所々の巨巖の上に小き石を積み重ねてあるは河原の中の

道しるへ愛らしい賽の河原の稚兒か親兄弟の爲めに茲に石を重ねたのてはあるまいか

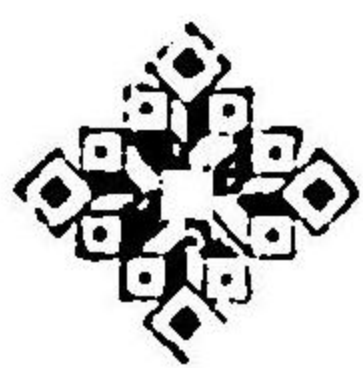
程なく梵字河原に出た兩岸は愈高く崩れ落ちた巨岩大石算を亂して列んで居る、雨は少しく歇んだか雲霧はまた去らぬ、互に見合せはみすばらしい姿となつて果は只大笑するばかり爾も其笑には千萬無量の苦味があつた、

此の河原を去つて後は丈に餘れる隈篋を分けるので身廻は悉く濡れる只かさ／＼音かするばかり僕なうは頭も見ぬなかつたといふよとてあつた、下るに従つて満山の紅葉いよ／＼美しく赤ひ毛布を冠つた山は是れてあるとは誰やらの形容であつた

やかて戰場原に出て湯瀧に廻り十一時頃山本温泉に着した二日間人家を見なかつたので斯んな邊鄙な温泉場でも大層高樓の列へる市街の如く見受けられて何となく人珍らしく思ふた

湯本で二日間の疲勞を癒し翌日即ち十四日早朝出發し是非とも歸京しやうといふので全速力を出し中禪寺華嚴の瀧壺裏見の瀧を見て七里ばかりの山路を寫真とり

つ、駈けて午後二時といふに照尊院に歸り着いたよ、一時間許休憩して英信師に訣を告げ四時發車の上り列車に投して十一時頃上野停車場に着いた停車場の外に出た時は吾ひとり世間に遠かれるもの過ぎもの、去れど吾身の清淨の光の百萬の燈火にも劣らぬ様に感した





明治三十七年十一月七日印刷
 明治三十七年十一月十四日發行

非賣品

著作兼發行所 尾陽舟

橋一也

同盟員

小野寺養四郎

宮城縣登米郡米川村大字野洲百五番地

同盟員

太田龜治郎

埼玉縣入間郡川越町大字川越百三十一番地

印刷擔務者

松本藏

栃木縣下都賀郡栃木町大字栃木百三十三番地

印刷者

玉野源次郎

東京市神田區區堅大工町二十四番地

印刷所

玉野活版所

東京市神田區區堅大工町二十三番地

不許複製

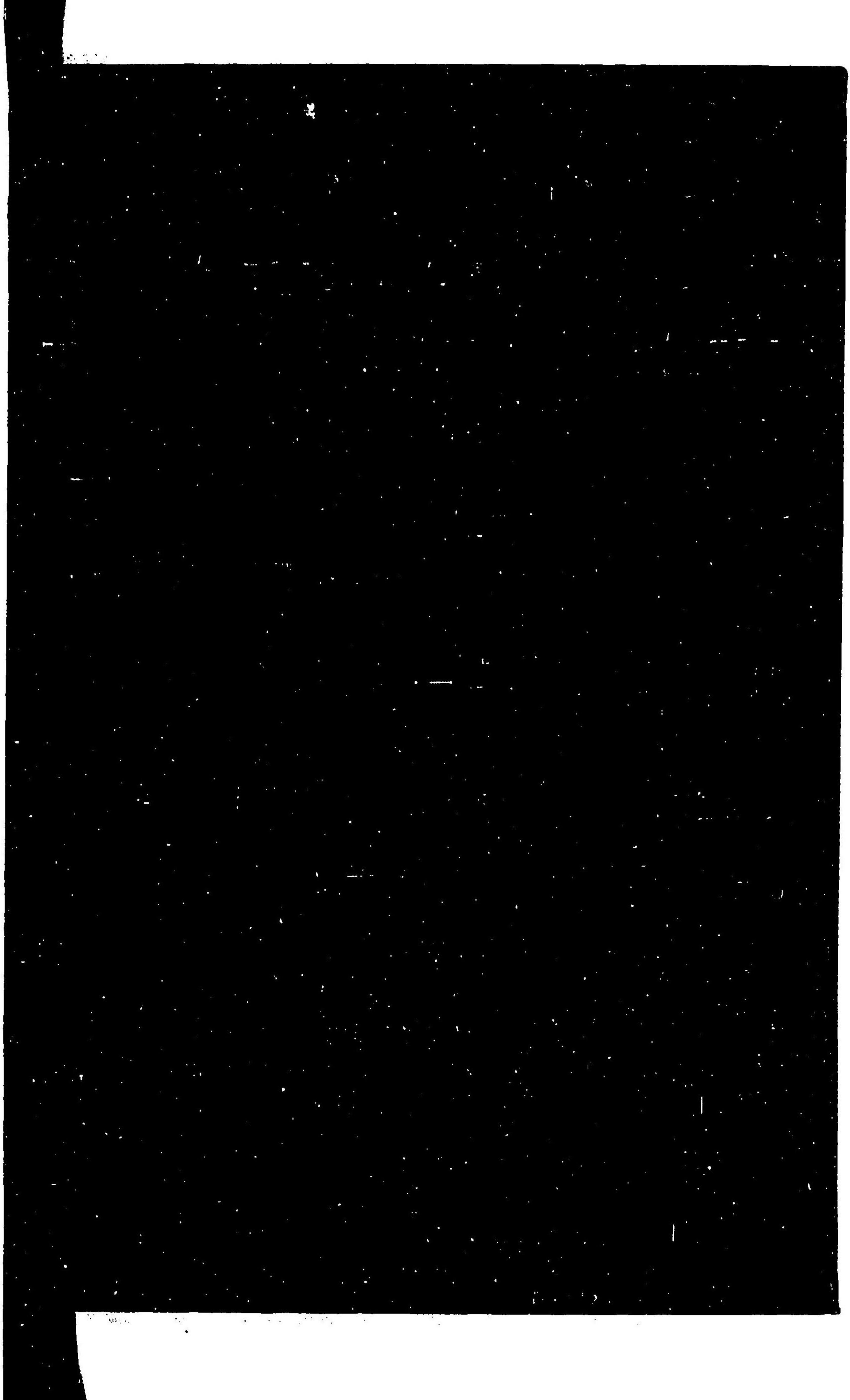
發行所

兩毛文庫本部

栃木縣下都賀郡栃木町大字齒部六番地







45
466

(M)

024193-000-7

45-466

栃木県誌

舟橋 一也/編

M37

ADC-1359

